

丹後沿岸海岸保全基本計画（変更）

最終案

令和8年7月

京 都 府

はじめに

丹後沿岸は、福井県境から兵庫県境までの日本海に面した3市2町（舞鶴市、宮津市、京丹後市、伊根町、与謝野町）にまたがる延長約317kmの海岸である。

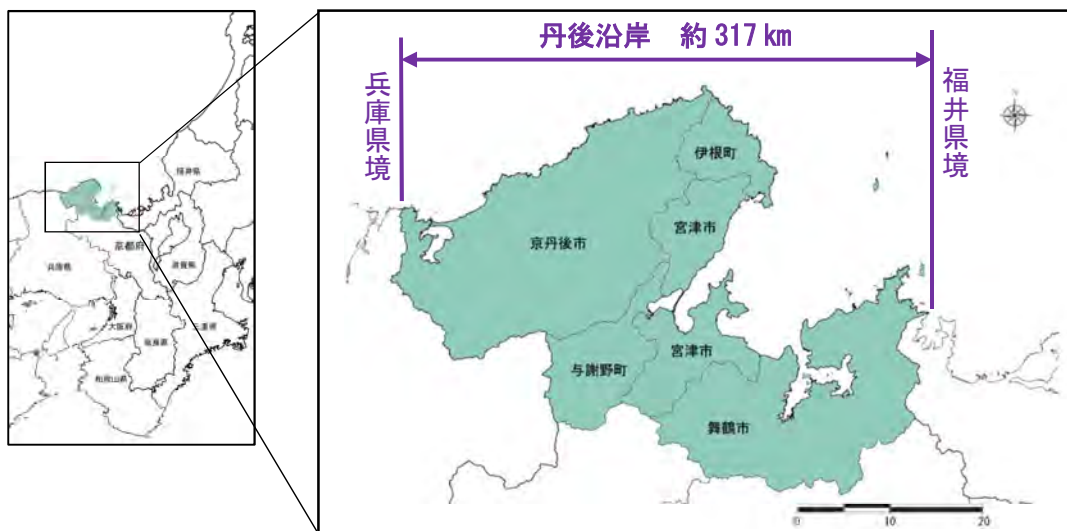
丹後沿岸の大浦半島から久美浜湾に至る海岸線は変化に富み、舞鶴湾、天橋立、伊根湾、経ヶ岬、琴引浜、夕日ヶ浦など、優れた自然景観を有し、東から若狭湾国定公園、丹後天橋立大江山国定公園及び山陰海岸国立公園に指定されている。

丹後半島の経ヶ岬より東側には、複雑に入り組んだ海岸線が美しい舞鶴湾や日本有数の景勝地で「日本三景」の一つである天橋立がある。また、伊根湾には国の重要伝統的建造物群保存地区にも選定された「伊根の舟屋」があり、美しい海とあいまった独特な漁村風景が広がっている。丹後半島の経ヶ岬より西側は山陰海岸ジオパークに認定されるなど、貴重な地形や地層を有する自然豊かな沿岸が広がっている。また、ポケットビーチや浜詰海岸から久美浜海岸にかけて約7kmにも及ぶ広大な砂浜海岸もあり、自然景観が豊かな海岸である。

平成11年に海岸法が抜本的に改正されたことにより、これまでの「海岸災害からの防護」に加え、「海岸環境の整備と保全」及び「公衆の海岸の適正な利用」が法目的に追加されたことから、京都府では日本海の厳しい自然が育んだ特色ある風景と、海辺のくらしを守ることを目標として、「防護」「環境」「利用」の調和のとれた総合的な海岸管理を目指すこととした「丹後沿岸海岸保全基本計画（以下、基本計画という。）を平成17年に策定した。

その後、平成23年に発生した東日本大震災による甚大な津波被害などを受けて、平成26年に海岸法の一部改正が行われ、国が海岸保全基本方針を変更し「津波・高潮等に対する海岸の防災・減災対策の強化」や「海岸保全施設の適切な維持管理」などが追加されたことを受け、平成30年7月に基本計画を変更し、事業を進めてきたところである。

今般、気候変動による影響を考慮した対策へ転換するため、令和2年11月に海岸保全基本方針が変更された。このため、京都府では、基本計画について将来の気候変動による海面水位の上昇や台風の強大化などを考慮した防護水準へ見直しを行い、気候変動に対応した計画へ変更するものである。



丹後沿岸

丹後沿岸海岸保全基本計画

目 次

第1章 海岸の保全に関する基本的な事項	1
1 海岸の特性	1
1-1 自然的特性	1
1-1-1 沿岸の現況	1
1-2 社会的特性	17
1-2-1 海岸の歴史	17
1-2-2 沿岸利用の現況	19
2 海岸保全の基本理念	31
3 海岸保全の現況と課題	32
3-1 防護面からみた現況と課題	32
3-2 環境・景観面からみた現況と課題	37
3-3 親水・利用面からみた現況と課題	39
4 海岸保全の基本方針	41
5 海岸保全の具体的施策	42
5-1 防護の目標を達成するための施策	42
5-2 海岸環境の整備及び保全のための施策	50
5-3 公衆の適正な利用を促進するための施策	52

第2章 海岸保全施設の整備に関する基本的な事項	54
1 整備ゾーンと保全の方向性	54
1-1 ゾーニング	54
2 海岸保全施設の新設又は改良	59
2-1 海岸保全施設の新設又は改良しようとする区域	59
2-2 海岸保全施設の種類、規模及び配置等	59
2-3 海岸保全施設による受益地域及びその状況	60
3 海岸保全施設の維持又は修繕	61
3-1 海岸保全施設の存する区域	61
3-2 海岸保全施設の種類、規模及び配置等	61
3-3 海岸保全施設の維持又は修繕の方法	61
第3章 留意すべき重要事項	74
1 関連計画との整合性の確保	74
2 関係機関との調整・連携	74
3 地域住民の参画と情報公開	75
4 調査・研究の推進	75
5 海岸協力団体の指定に向けた取り組み	76
6 計画の見直し	76

第1章 海岸の保全に関する基本的な事項

1 海岸の特性

1-1 自然的特性

1-1-1 沿岸の現況

(1) 地形

丹後沿岸は、最北端の^{きょうがみさき}経ヶ岬を境として、若狭湾沿岸域と山陰海岸沿岸域の2つに分けられる。若狭湾沿岸域では、^{おおうら}大浦・^{くんだ}栗田の各半島があり海岸線の入り組んだリアス海岸であり、舞鶴湾・栗田湾・宮津湾がある。内陸部（沿岸部）は、低い山地がほぼ全域を占めている（図1-1-1）。

山陰海岸沿岸域では、経ヶ岬から西南西に延びる海岸線は凹凸が小さく、若狭湾沿岸域と異なる地形となっている。内陸部（沿岸部）は低い山地が全体を覆っており、流入河川が少なく、大地が崖となって海に入る所が多く見られ、海底地形も急傾斜地形を示している。また、岩礁に挟まれたポケットビーチが多く存在している（図1-1-2）。

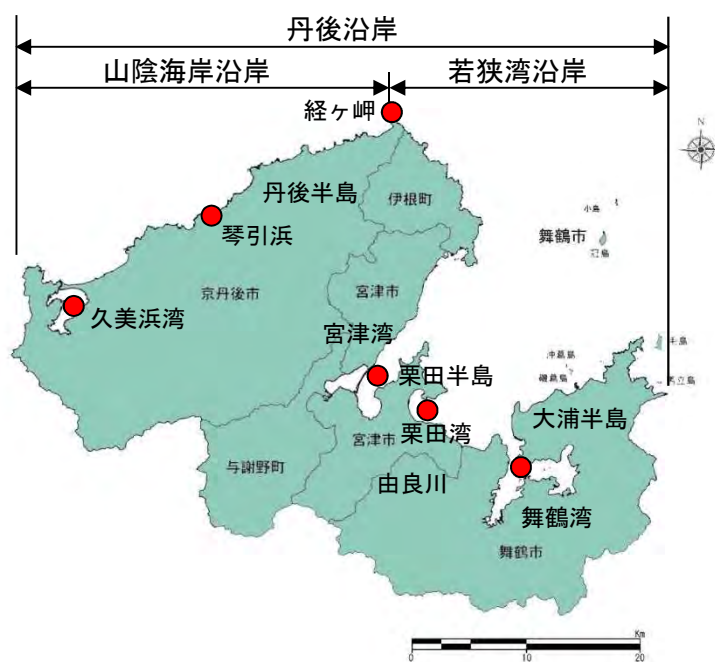


図1-1-1 丹後沿岸



図1-1-2 ポケットビーチ(琴引浜周辺)

若狭湾沿岸域は幅 20~30km の大陸棚からなっており、大陸棚外縁の水深は 120~125m である。陸棚縁辺に続く斜面部は、緩やかな勾配で沖合に続いている。

海岸線は入り組んだリアス海岸となっており沈降傾向にあると考えられているが、一部地域では海成段丘かいせいだんきゅうが認められ、隆起しているところもあり、沈降は一様ではない。

山陰海岸沿岸域の沖合には、日本海形成の過程で生まれた急傾斜地形や海底谷の起伏に富んだ海底地形であり、海岸線から 15km で水深 200m に達している。また、沖合には、浦島礁や白石礁が存在し、良好な漁場を形成している（図 1-1-3）。

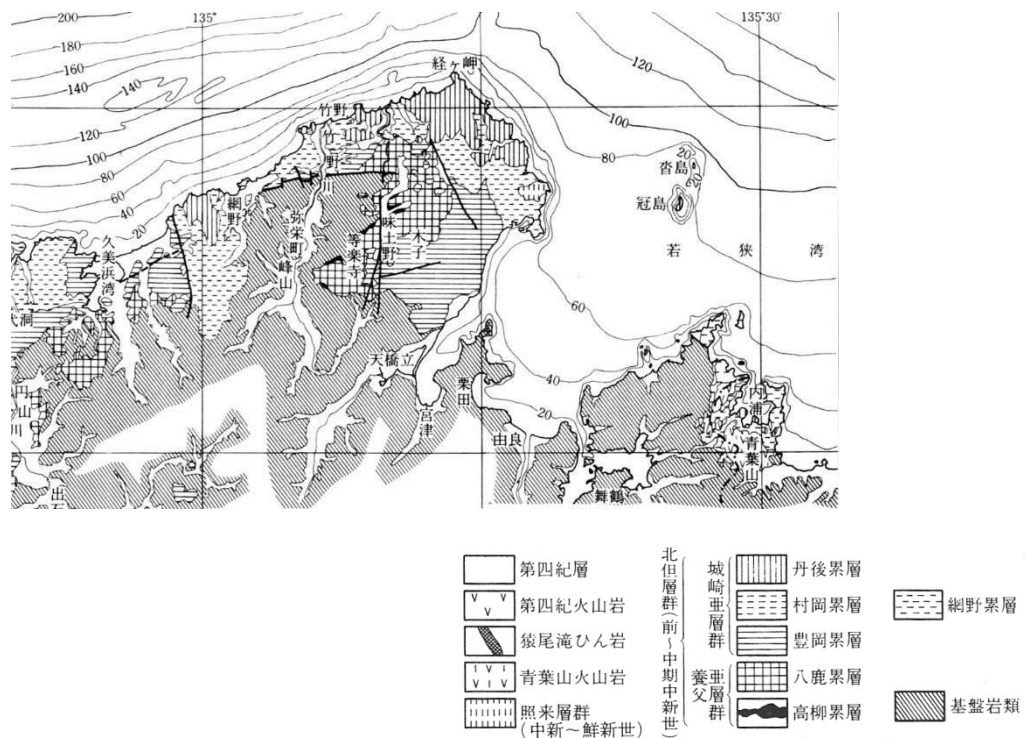


図 1-1-3 海底地形図

出典：「日本の地質 6 近畿地方」 共立出版株式会社

(2) 地質

広域地質図（図 1-1-4）に示すように、若狭湾沿岸域の大浦半島から由良川河口付近には、古生代の堆積岩や変成岩が東北東－西南西方向に分布している。また、由良川から宮津湾にかけては、古第三紀の宮津花崗岩が広く分布している。

山陰海岸沿岸域には、新第三紀中新統北但層群の堆積岩や火成岩が分布している。竹野川や浅茂川などの河川に沿った平地には、第四期完新世の沖積層や段丘層による平地が分布している。

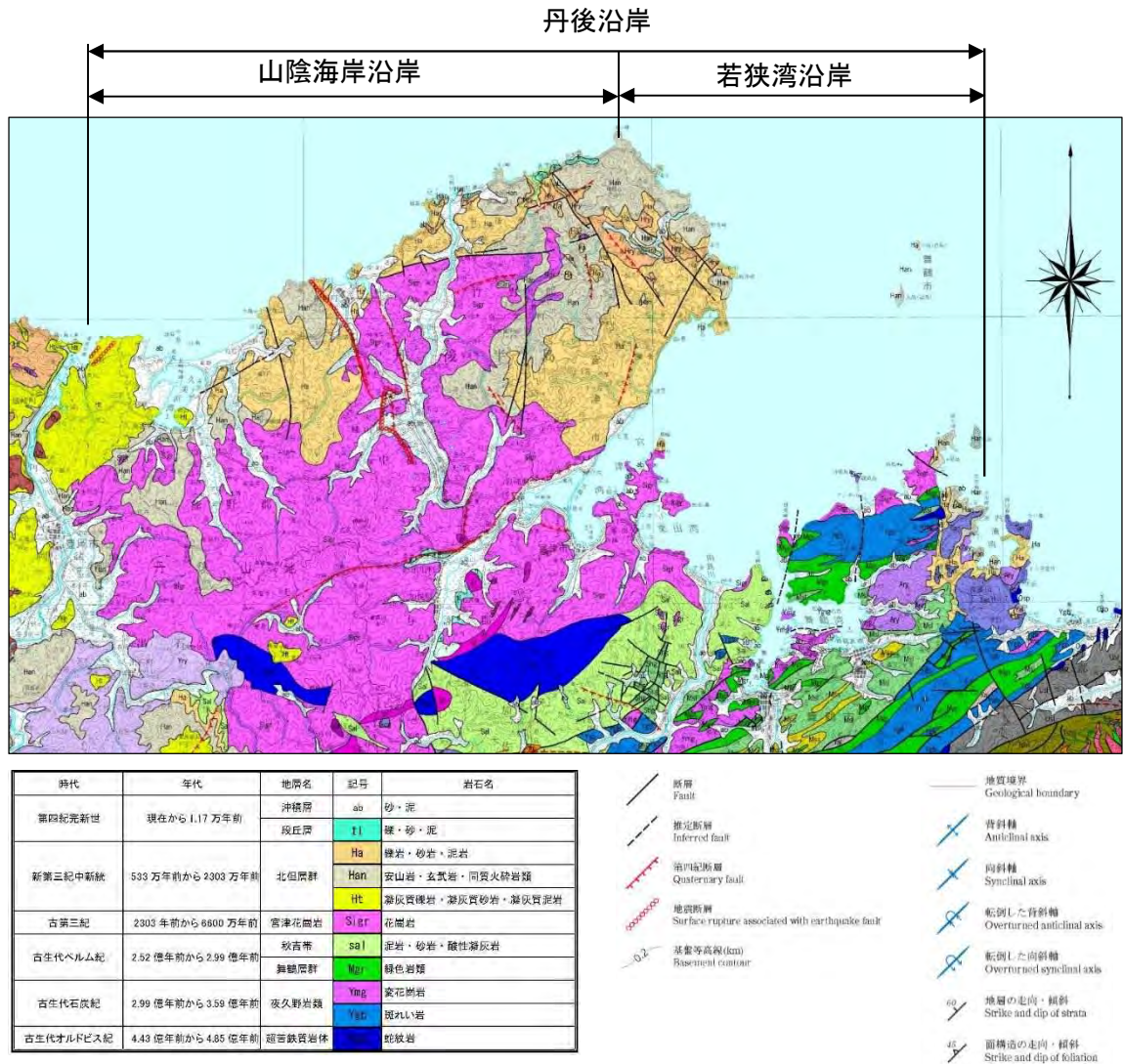


図 1-1-4 広域地質図

出典：「日本の地質 6 近畿地方」 共立出版株式会社

(3) 底質

丹後沿岸はリアス海岸のため、海底には岩石が点在しており、沖合の浦島礁にも岩が確認される。若狭湾沿岸域は湾奥まで泥が入り込んでおり、一部で砂泥混合も見られる。

山陰海岸沿岸域の水深 200m より岸側では、細砂や砂が広く分布し、一部で砂泥混合も見られる。水深 200m より沖には、青色泥が広く分布している（図 1-1-5）。

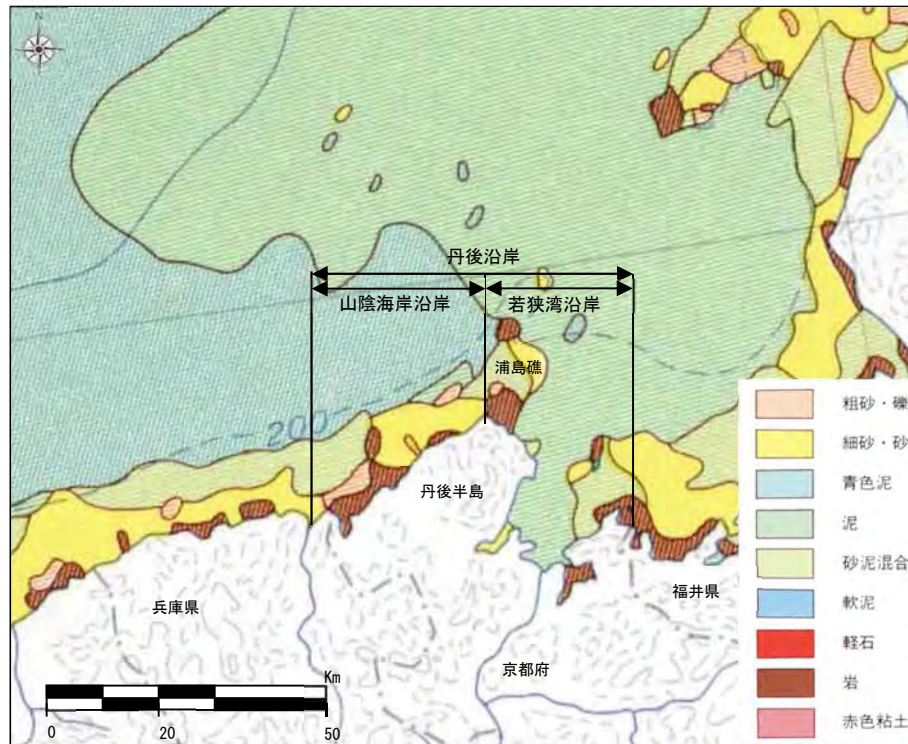


図 1-1-5 近海底質（若狭湾）

出典：国土地理院 近海底質図から抜粋

(4) 活断層

丹後半島には、活断層(第四紀断層及び地震断層)が確認されている(図 1-1-6)。

山田断層は、丹後半島の基部を東北東-西南西方向に延びる北側隆起を伴う右横ずれ断層である。郷村断層^{ごうむら}は、丹後半島から北方の日本海にかけて、北北西-南南東方向に延びる左横ずれ断層である。両断層とも 1927 年(昭和 2 年)北丹後地震の際に出現している。

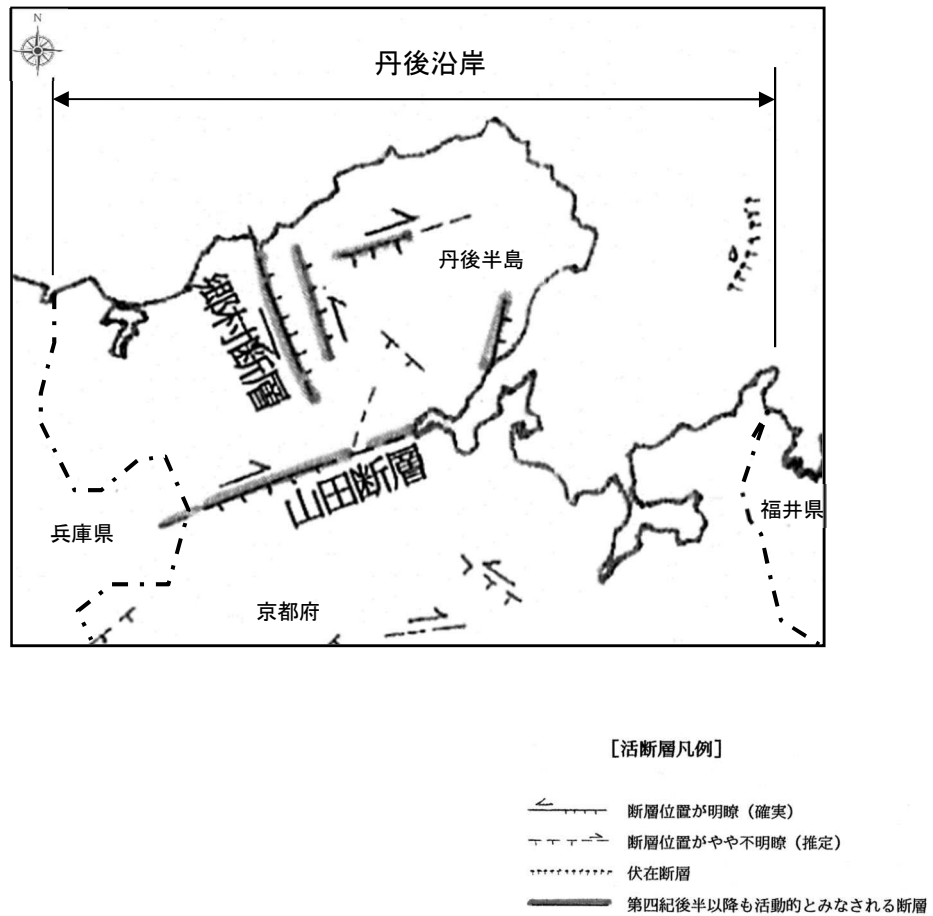


図 1-1-6 京都沿岸部の活断層

出典：近畿地方土木地質図 近畿地方の主な活断層(確実度 I 及び II)

(佐野正人編図、2002)より抜粋

(5) 自然景観

丹後沿岸には、^{にいざき}経ヶ岬・^{ことひきはま}新井崎などの岩石海岸や、^{あまのはし}琴引浜などの砂浜海岸、^{だて}天橋立・^{しょうてんきょう}小天橋などの砂州地形、舞鶴湾などのリアス海岸をはじめとする多様な海岸地形が見られる。

このため、すぐれた海岸景観の見られる地点が多く、これらのほとんどは主要な観光資源になっている（図 1-1-7）。

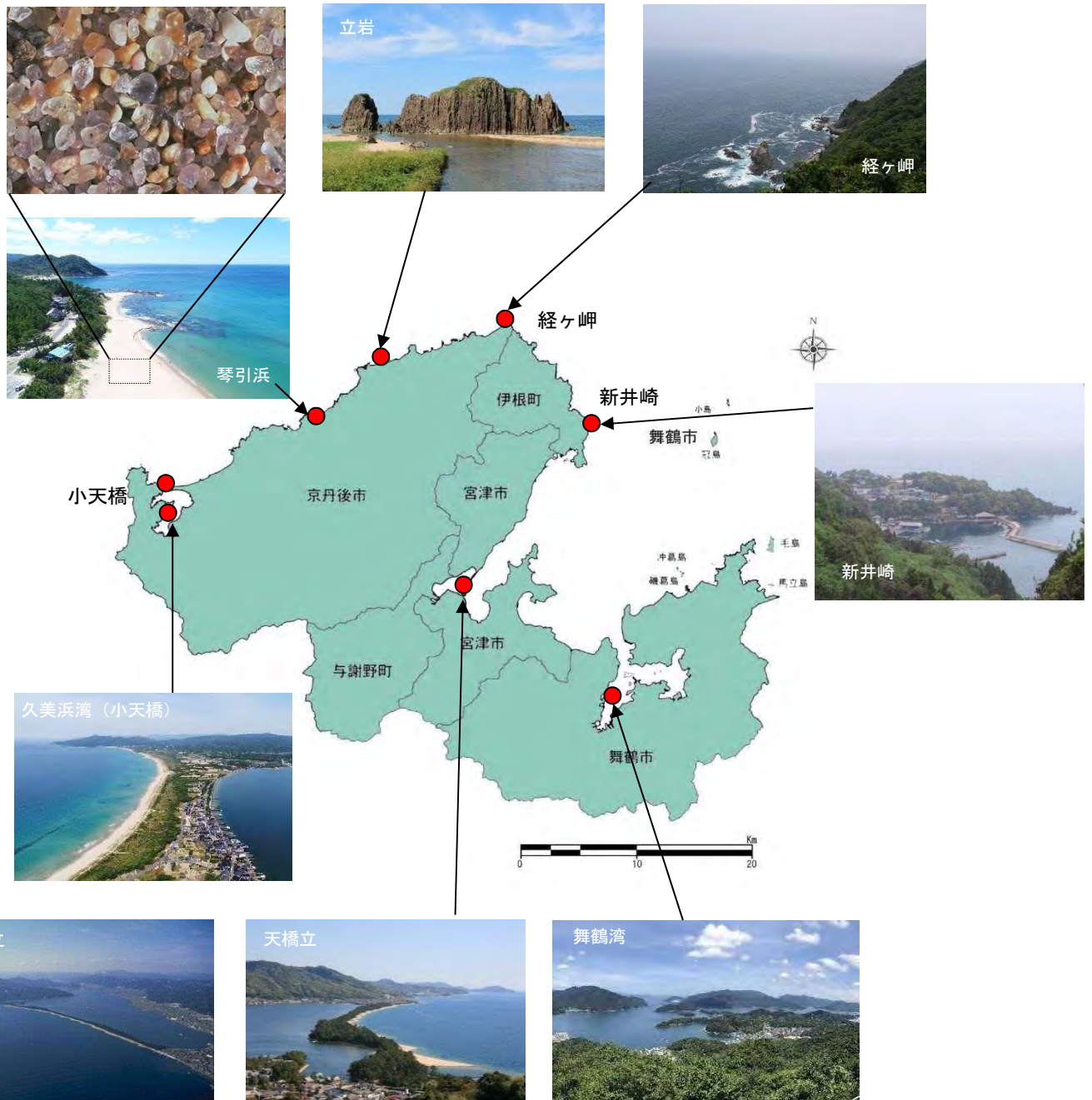


図 1-1-7 自然景観

(6) 気象・海象

丹後沿岸の気温や降水量は、舞鶴特別地域気象観測所（以下「舞鶴」という。）などで観測されている（図 1-1-8）。舞鶴での年平均気温は約 16℃であり、気候は暖かく温暖に分類される。冬季は日本海側特有のしぐれや降雪のために多雨多雪で、年間を通じて降水量は多い。月平均降水量は 150mm 程度である（図 1-1-9）。

間人^{たいざ}地域気象観測所（以下「間人」という。）における風向は、海陸風や局地的な地形の影響を受けて、南東が卓越しており、ついで北北東から東北東が多くなっている。冬季には季節風により北西を中心とした風が多くなる（図 1-1-10）。

経ヶ岬の波浪観測によると有義波高及び周期の平均値はそれぞれ 1.00m、6.48 秒であり、また最大波の波高、周期の平均値はそれぞれ、1.62m、7.57 秒である。波高は、2m以下の発生頻度が 86%占めており、周期は 4～8 秒の頻度が高い。

波高の季節変動は大きく、冬季に最大値、夏季に最小値となっている。波向は北を中心に北北西から北東の範囲で出現する。最大波における月別の最大値は 10 月に記録されている 14.35m である。また、周期については 12.5 秒が最大で 2 月に記録されている（図 1-1-11）。

潮位は気象庁により舞鶴で観測が行われている。舞鶴における過去最高潮位は T.P. +0.93m（1998 年 9 月 22 日：台風 7 号）である（図 1-1-12）。



図 1-1-8 観測所位置図

出典：気象庁 HP

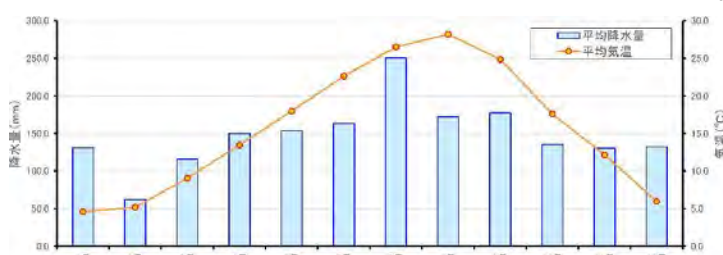


図 1-1-9 舞鶴 月別平均気温、降水量

出典：気象庁 HP（2020 年～2024 年データ）

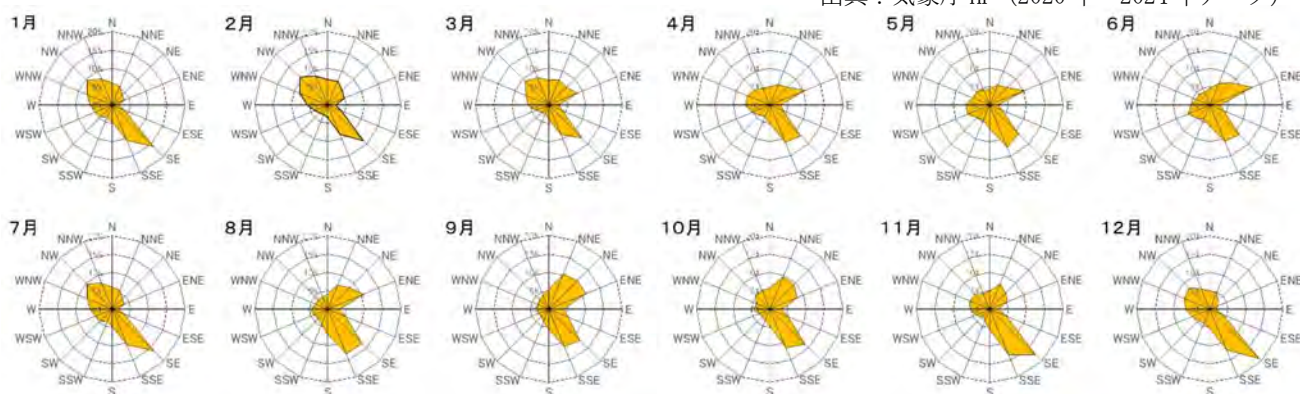
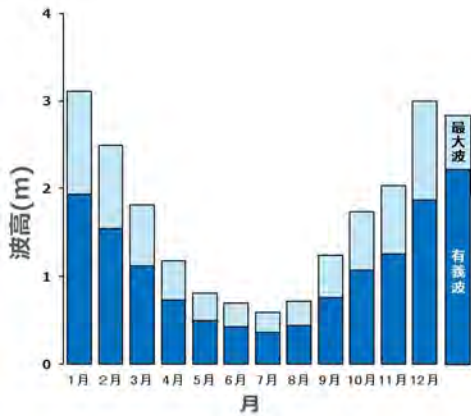


図 1-1-10 各月の風向(間人):1目盛は5%

7 出典：「気象庁 HP」(間人観測所) (1977～2024 年データ)

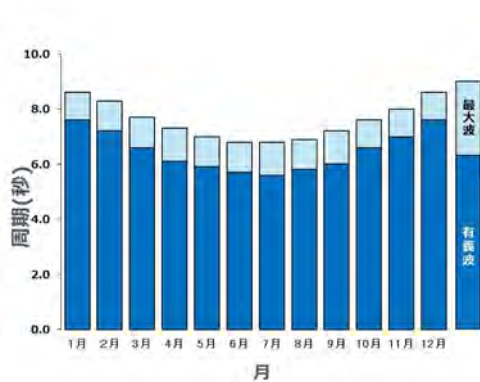


単位：(m)

	12月		1月		2月		3月		4月		5月	
	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波
平均	1.87	3.00	1.93	3.11	1.55	2.49	1.12	1.81	0.73	1.18	0.50	0.81
標準偏差	1.22	—	1.19	—	1.11	—	1.03	—	0.74	—	0.50	—
最大値	7.83	12.33	7.66	12.08	5.67	8.94	7.27	11.55	7.05	11.04	5.18	8.31

	6月		7月		8月		9月		10月		11月	
	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波
平均	0.43	0.70	0.36	0.59	0.44	0.72	0.76	1.24	1.07	1.73	1.26	2.03
標準偏差	0.42	—	0.31	—	0.40	—	0.77	—	1.01	—	0.98	—
最大値	4.10	6.48	3.39	5.46	4.13	6.57	7.80	12.31	9.13	14.35	5.29	8.33

図 1-1-11(1) 月別の波高の平均値・標準偏差及び最大値・最小値



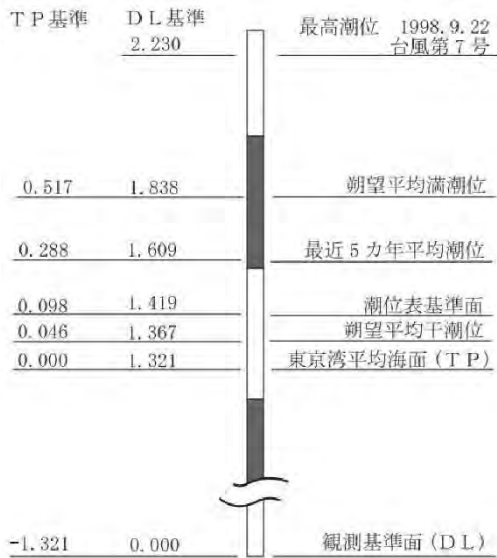
単位：(秒)

	12月		1月		2月		3月		4月		5月	
	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波
平均	7.60	8.60	7.60	8.60	7.20	8.30	6.60	7.70	6.10	7.30	5.90	7.00
標準偏差	1.60	—	1.50	—	1.50	—	1.70	—	1.70	—	1.70	—
最大値	11.00	11.40	11.50	11.20	12.50	11.20	8.90	10.30	9.00	12.20	7.60	9.10

	6月		7月		8月		9月		10月		11月	
	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波	有義波	最大波
平均	5.70	6.80	5.60	6.80	5.80	6.90	6.00	7.20	6.60	7.60	7.00	8.00
標準偏差	1.70	—	1.50	—	1.60	—	1.50	—	1.70	—	1.70	—
最大値	11.40	10.50	7.00	8.50	9.70	10.20	11.20	11.20	11.60	11.70	10.50	11.30

図 1-1-11(2) 月別の周期の平均値・標準偏差及び最大値・最小値

出典：気象庁 HP 経ヶ岬波浪観測累計表（2010～2024年）



潮位図（1969年～2017年データ）

出典：令和6年4月舞鶴港港湾計画図
（1998.9.22 台風第7号 最高潮位(T.P.基準)を追記）



潮位の経年変化（1969年～2024年データ）

出典：気象庁 HP

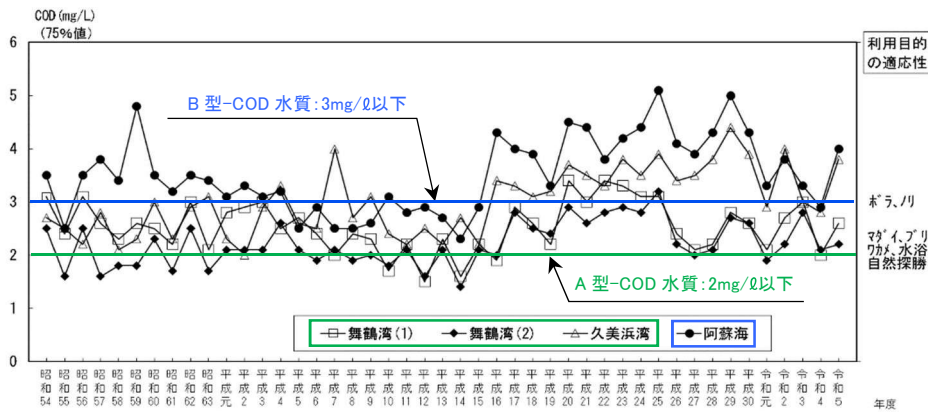
図 1-1-12 舞鶴の潮位

(7) 水質

丹後沿岸の水質は、外洋に面した開放性の海岸と内湾で異なる。

外洋に面した開放性の海岸では、水質基準を満足しており、良好な水質環境が保たれている。観測所のある久美浜湾沖、竹野川沖、鷲崎沖、波見埼沖、栗田湾沖では、有機汚濁の代表的な指標である COD の環境基準を満足している（表 1-1-1、図 1-1-14）。

一方、内湾の舞鶴湾、宮津湾、久美浜湾、阿蘇海では海水交換の悪い閉鎖性水域であることから、有機汚濁の代表的な指標である COD の環境基準は未達成が続いている（図 1-1-13）。



(注) 1つの水域に複数の環境基準点がある場合は、そのうちの最大値を表記しています。

図 1-1-13 主要環境基準点(海域)の COD の年次推移 (年平均値)

表 1-1-1 環境基準点の環境基準達成状況(COD)

あてはめ水域名	類型	環境基準点		達成状況	備考
		地点数	名称		
舞鶴湾(1)	A	2	念仏鼻地先	×	〔 類型毎の環境基準点 〕 A…2mg/L以下 B…3mg/L以下 C…8mg/L以下
			榑埼地先		
舞鶴湾(2)	A	2	キンギョ鼻地先	×	
			恵比須埼地先		
宮津湾	A	2	江尻地先	×	
			島埼地先		
阿蘇海	B	3	野田川流入点	×	
			中央部		
			溝尻地先		
若狭湾	A	3	栗田湾沖	○	
			波見埼沖		
			鷲崎沖		
山陰海岸	A	2	竹野川沖	○	
			久美浜湾沖		
久美浜湾	A	2	湾口部	×	
			湾奥部		

(注)1 環境基準の達成状況については、年間を通じた日間平均値の75%水質地により評価しています。

(注)2 水域毎の評価は、各水域内の全ての環境基準点において適合している場合、達成(○)としています。

出典：京都府「環境白書(令和6年度版)」(類型ごとにハッチングを追加)

あてはめ水域名	類型	環境基準点		達成状況	備考
		地点数	名称		
舞鶴湾(ア)	II	2	念仏鼻地先	○	〔 類型毎の環境基準点 〕 (全窒素) I…0.2mg/L以下 II…0.3mg/L以下 III…0.6mg/L以下 IV…1mg/L以下 (全磷) I…0.02mg/L以下 II…0.03mg/L以下 III…0.05mg/L以下
			榑埼地先		
舞鶴湾(イ)	II	2	キンギョ鼻地先	○	
			恵比須埼地先		
宮津湾	II	2	江尻地先	○	
			島埼地先		
阿蘇海	II	3	野田川流入点	×	
			中央部		
			溝尻地先		
久美浜湾	II	2	湾口部	×	
			湾奥部		

(注)1 環境基準の達成状況については、表層の年間平均値により評価しています。

(注)2 水域毎の達成状況は、各水域内の全ての環境基準点において適合している場合、達成(○)としています。

出典：京都府「環境白書(令和6年度版)」

海 域				
類型	COD水質	類型	全窒素水質	全磷水質
A	2mg/L以下	I	0.2mg/L以下	0.02mg/L以下
B	3mg/L以下	II	0.3mg/L以下	0.03mg/L以下
C	8mg/L以下	III	0.6mg/L以下	0.05mg/L以下
		IV	1mg/L以下	0.09mg/L以下

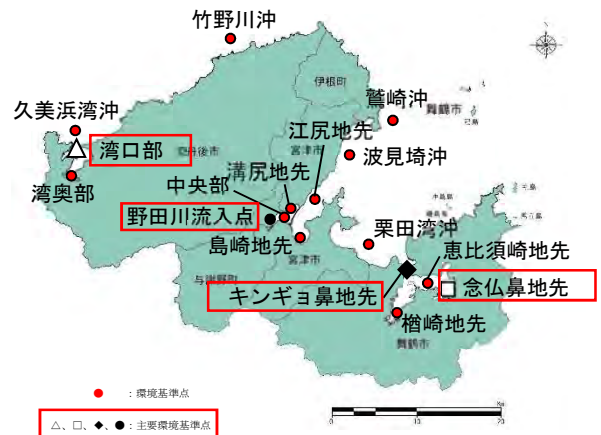


図 1-1-14 環境基準測定地点

(8) 河川流入

丹後沿岸にそそぐ河川は、一級河川由良川と二級河川 37 河川である(表 1-1-2)。

由良川は、その源を京都・滋賀・福井の府県境杉尾坂に発し、北桑田の山間部を流れ、高屋川、上林川などを合わせて綾部を貫流し、さらに福知山に出て土師川を合わせ、北流して舞鶴市及び宮津市において日本海に注ぐ、幹川流路延長 146km、流域面積 1,880km²の一級河川である。丹後沿岸に注ぐ二級水系は、短流路で小流域が多い(図 1-1-15)。

表 1-1-2 丹後沿岸に流入する京都府の二級河川

	河川名	流路延長 (km)	流域面積 (km ²)		河川名	流路延長 (km)	流域面積 (km ²)
1	野原川	4.1	7.4	20	真名井川	0.6	1.0
2	瀬崎川	1.0	1.7	21	畑川	2.4	5.5
3	大丹生川	2.8	5.9	22	世屋川	2.1	16.3
4	河辺川	5.4	15.0	23	波見川	3.9	10.4
5	朝来川	5.6	13.3	24	犀川	2.9	7.2
6	志楽川	6.7	15.3	25	朝妻川	3.8	5.7
7	祖母谷川	6.3	9.1	26	筒川	14.4	47.0
8	与保呂川	7.1	18.5	27	吉野川	3.3	11.0
9	伊佐津川	17.0	75.0	28	宇川	18.6	54.2
10	高野川	7.2	16.2	29	竹野川	32.6	206.4
11	福井川	2.2	5.2	30	樋越川	0.6	9.5
12	大雲川	2.0	6.7	31	福田川	12.4	30.5
13	神子川	2.0	3.6	32	木津川	3.8	15.3
14	大膳川	0.8	2.0	33	佐濃谷川	19.0	54.2
15	大手川	4.8	27.6	34	川上谷川	11.5	44.8
16	宮川	1.0	1.4	35	栃谷川	4.3	5.5
17	野田川	15.4	99.2	36	久美谷川	4.5	15.3
18	男山川	2.8	6.0	37	新樋越川	0.7	11.0
19	三田川	1.3	2.3				

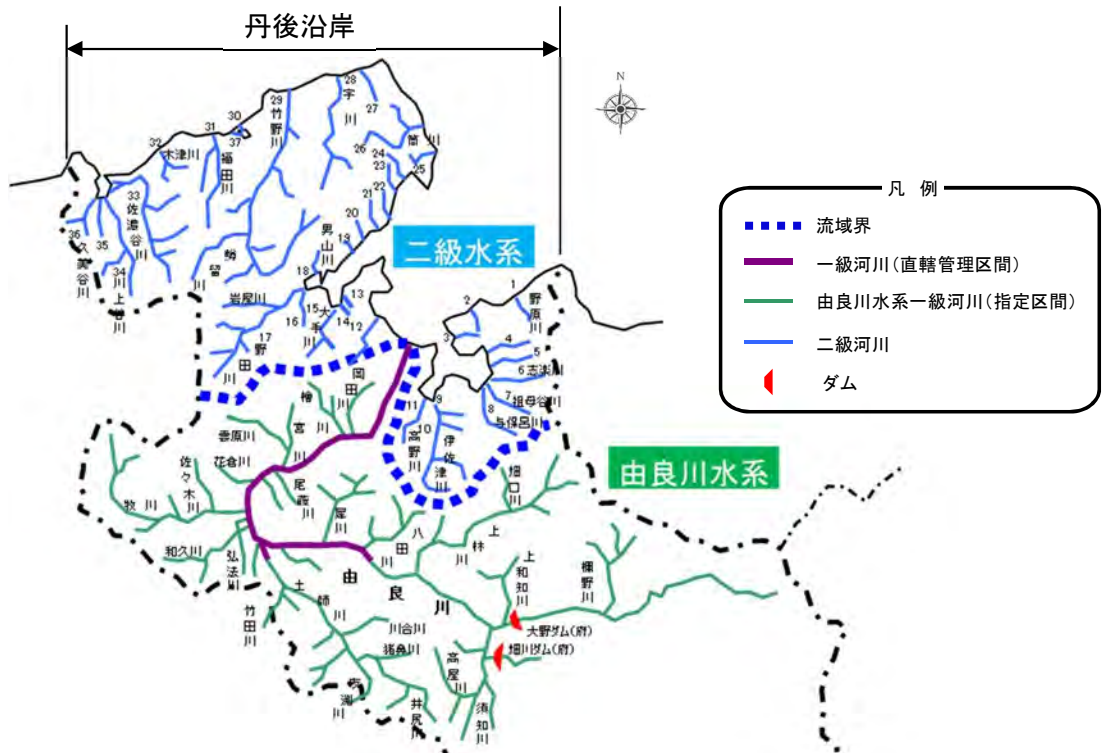


図 1-1-15 丹後沿岸 流入河川位置図

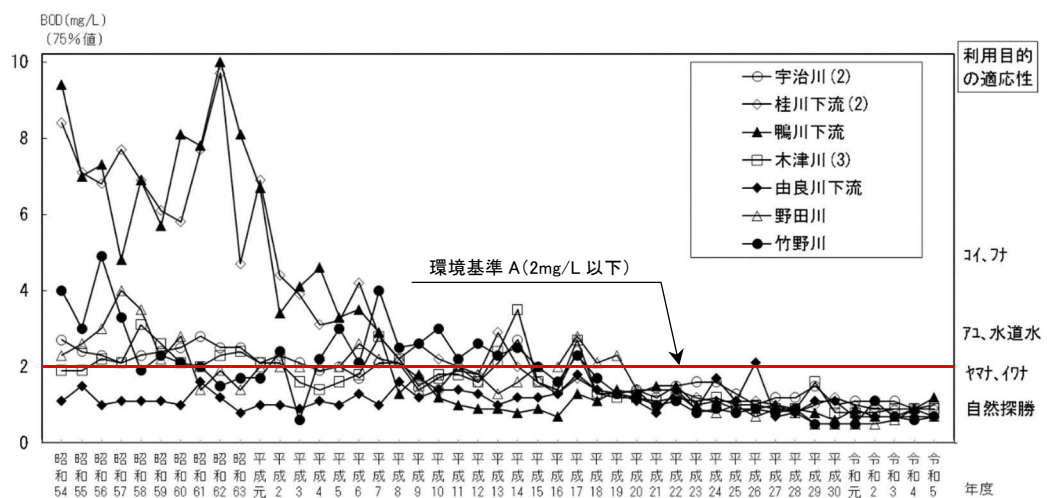
由良川で多くの被害が発生した平成16年10月台風23号の降雨は、時間最大雨量40～50mm/hr程度で、20mm/hr以上の雨が5時間以上続き、由良川の基準観測所（福知山）では最大流量5,285m³/sを記録した。また、平成25年9月台風18号の降雨では、最大流量が過去最大の5,400m³/sを記録し、府では初の大雨特別警報が発令された。由良川的主要な洪水を表1-1-3に示す。

表 1-1-3 由良川の主な洪水

発生日月	要因	総雨量 (mm)	最高水位 (m)	最大流量 (m ³ /s)	災害救助法適用	被害状況									
						人的被害 (人)		家屋被害 (戸)							
						死者	負傷者	流失	全壊	大規模半壊	半壊	一部損壊	床上浸水	床下浸水	
昭和28年09月25日	台風13号	360.2	7.80	6,500	●	12	820	84	986	-	1,384	-	4,075	284	
昭和34年09月26日	伊勢湾台風 (台風15号)	247.6	7.10	4,384	●	1	28	7	10	-	144	-	3,958	1,780	
昭和36年09月16日	第2室戸台風	-	5.30	-	●	3	6	-	11	-	200	-	179	10	
昭和36年10月28日	台風26号	234.8	5.33	2,402	●	-	-	-	-	8	-	-	767	1,708	
昭和40年09月14日	秋雨前線	473.6	5.41	2,833	●	-	-	-	-	-	-	-	490	1,314	
昭和40年09月18日	台風24号	473.6	5.41	2,833	●	-	-	-	3	-	1	-	411	1,534	
昭和47年09月16日	台風20号	188.1	6.15	4,063	●	-	5	-	4	-	33	-	527	1,024	
昭和57年08月02日	台風10号	188.3	5.45	3,636	●	-	-	-	-	-	-	-	29	21	
昭和58年09月28日	台風10号	245.6	5.57	3,608	●	1	-	-	5	-	3	8	14	178	
平成2年09月20日	台風19号	250.3	4.64	2,469	●	-	-	-	-	-	-	-	-	62	
平成16年10月20日	台風23号	288.7	7.55	5,285	●	2	2	-	-	-	59	115	755	731	
平成18年07月19日	梅雨前線	-	5.00	2,456	●	-	1	-	-	-	-	79	-	-	
平成23年05月29日	台風2号	-	5.14	2,385	●	-	-	-	-	-	-	-	1	8	
平成23年09月20日	台風15号	-	5.73	3,188	●	-	-	-	-	-	-	-	4	11	
平成25年09月16日	台風18号	299.0	8.30	5,400	●	-	-	-	2	19	311	423	356	-	
平成26年08月16日	秋雨前線	178.0	6.48	3,516	●	-	-	-	13	6	266	3,968	2,029	2,471	
平成29年10月23日	台風21号	245.6	7.39	4,270	●	-	-	-	-	-	12	11	98	227	
平成30年07月07日	梅雨前線	380.5	6.52	3,574	●	-	-	-	14	-	40	-	414	747	

出典：「R5.8 由良川水系河川整備基本方針」（出水規模などを補間して再整理）

丹後沿岸に流入する河川の水質は、由良川、野田川、佐濃谷川、伊佐津川で経年的に観測されている。近年は、全水域で環境基準を達成している（図1-1-16）。



(注) 1つの水域に複数の環境基準点がある場合は、そのうちの最大値を表記しています。

図 1-1-16 丹後沿岸 流入河川の水質 (BOD:75%値)

出典：京都府「環境白書（令和6年度版）」

(9) 陸域の生物

① 植物

丹後沿岸には希少な植生が多く分布している。これらの多くは、温暖な対馬海流や海洋性気候の影響を受けて発達したシイ林、タブ林などの暖温帯性常緑広葉樹林である。この他に、クリ・ミズナラ・クヌギ・コナラなどの二次林が、ほぼ全域の山地に分布するとともに、天橋立や経ヶ岬のクロマツ林、神崎浜のハマナスや箱石浜（久美浜海岸）の砂丘植生なども見られ、箱石浜には府絶滅危惧種のトウテイランがある（図 1-1-17、図 1-1-18）。



図 1-1-17 トウテイラン



＜凡 例＞			
110103スギ・ブナ群落	260000牧採草地群落 (V)	310100ハシラ群落 (VI)	470400シラカス
110104クワコサ群落	270100シラカス群落	320100ヤナギ高木群落 (VI)	470501ツルシカス
110401カシ群落 (VI)	270200アカシ群落	320200ヤナギ低木群落 (VI)	470502ヤナギ群落
140000ツグ群落	270300アカシ群落	320300ツグハシラ群落	470503ヒルシラカス
140802ツグ・アサギ・ヒノキ群落	270400ツグ・ヒノキ群落	340101マサキ・トナリ群落	470600ヒルシラカス
160101シラカス・モミジ・サワグルミ群落	270500ツグ・ヒノキ群落	400100シラカス・コナラ群落	470801オニグルミ群落
160103ツグ・アサギ・サワグルミ群落	270600ツグ・ヒノキ群落	400200ツグ・コナラ群落	470802ツグ・コナラ群落
160401ツグ・アサギ・サワグルミ群落	270802ツグ・ヒノキ群落	410105アサギ・コナラ群落	470803ツグ・コナラ群落
180000定常地・農地低木群落	271102ツグ・ヒノキ群落	410400ツグ・コナラ群落 (VII)	480000砂丘植生
220100ツグ・ミズナラ群落	271200ツグ・ヒノキ群落	410700ツグ・コナラ群落	480100ハマナス群落
220101ツグ・ミズナラ群落	271203ツグ・ヒノキ群落	410800ツグ・コナラ群落 (VII)	500000海岸砂丘植生
220102ツグ・ミズナラ群落	271705ツグ・ヒノキ群落	420102ツグ・コナラ群落	540100スギ・ヒノキ群落
220401ツグ・ミズナラ群落	271800ツグ・ヒノキ群落	420104ツグ・コナラ群落	540200ツグ・コナラ群落
220503ツグ・ミズナラ群落	271801ツグ・ヒノキ群落	430200ツグ・コナラ群落	540300ツグ・コナラ群落
220700ツグ・ミズナラ群落 (V)	280101ツグ・ヒノキ群落	440000低木群落	540700ツグ・コナラ群落
221200ツグ・ミズナラ群落 (VI)	280102ツグ・ヒノキ群落	440200ツグ・コナラ群落	540900外圍植生
230100ツグ・コナラ群落 (VI)	280200ツグ・ヒノキ群落 (VI)	450100ツグ・コナラ群落 (VII)	541000ツグ・コナラ群落
240000高木広葉樹群落	300100ツグ・コナラ群落 (VI)	450102ツグ・コナラ群落	550000竹林
250100ツグ群落 (V)	300102ツグ・コナラ群落	460000牧採草地群落 (VII)	560100ツグ・コナラ群落
250200ツグ群落 (V)	300104ツグ・コナラ群落	470300牧採草地小葉群落	560200牧草地
			560600開拓水域
			560700自然草地
			570100牧草地
			570200果樹園
			570301高木
			570302雑草群落
			570400水田雑草群落
			570500農業水田雑草群落
			580100小畑地
			580200残存・植生群落をもつ公園、墓地等
			580300工場地帯
			580400農地
			580600開拓水域
			580700自然草地

図 1-1-18 丹後半島 植生図

出典：環境生物多様性センター「1/25,000 植生図」（GIS により表示）

② 昆虫類

丹後沿岸で確認されている昆虫類は、指標昆虫^{※1}が5種、特定昆虫類^{※2}が23種である。海岸に比較的近い地域に見られる種は、京丹後市のコサナエ、宮津市のムカシトンボ、久美浜湾のヒヌマイトトンボであり、他は丘陵地から山地にかけて分布している（図1-1-19）。海岸砂地やそれに続く草原、あるいは河川沿いの草地では、全国的にも多くの昆虫の生息域の減少が報告され、京都府でも、近年では従来のカワラバッタなどに加え、砂地の河川敷に生息するカワラゴミムシなどが府レッドリストに追加された（図1-1-20）。

琴引浜では58種類のハチが確認され、種数が比較的多く、種多様性に富むと言われている。また、冠^{かんむり}島には、18種の特定昆虫類が確認されており、自然が豊富に残っていることを示している（図1-1-21）。

※1：分布域が広く、比較的馴染みがあり、かつ全体として山地から平野までの良好な自然環境の指標となる昆虫として環境省により選定された昆虫類

※2：都道府県ごとに、山地から平野までの良好な自然環境の指標となる昆虫として選定された昆虫類



図1-1-19 ヒヌマイトトンボ

出典：京都府HP



図1-1-20 カワラバッタ

出典：京都府HP

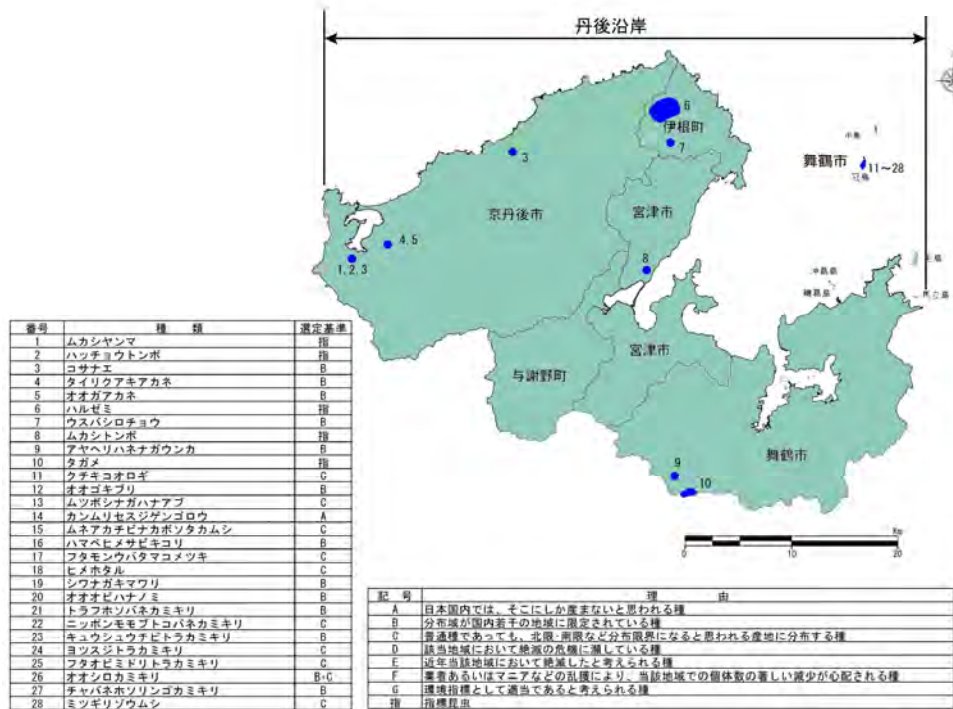


図1-1-21 希少昆虫類の分布

出典：第2回自然環境保全基礎調査 京都府動植物分布図（昭和56年）

③ 動物類・鳥類

京都府のレッドデータブックに記載されている哺乳類の内、丹後沿岸ではニホンザルやカモシカ、ムササビなどが確認されている。その他にもタヌキやキツネ、イタチ、アナグマ、イノシシなど、多種多様な動物類が生息している。

また、鳥類では、冠島かんむりじま、沓島くつじま、宮津湾・阿蘇海、久美浜湾が水鳥の集団繁殖地・渡来地となっており、冠島は京都府の鳥であるオオミズナギドリの繁殖地として、国指定の天然記念物に指定されている（図1-1-22、図1-1-23）。



図 1-1-22 オオミズナギドリ

出典：京都の自然 200 選

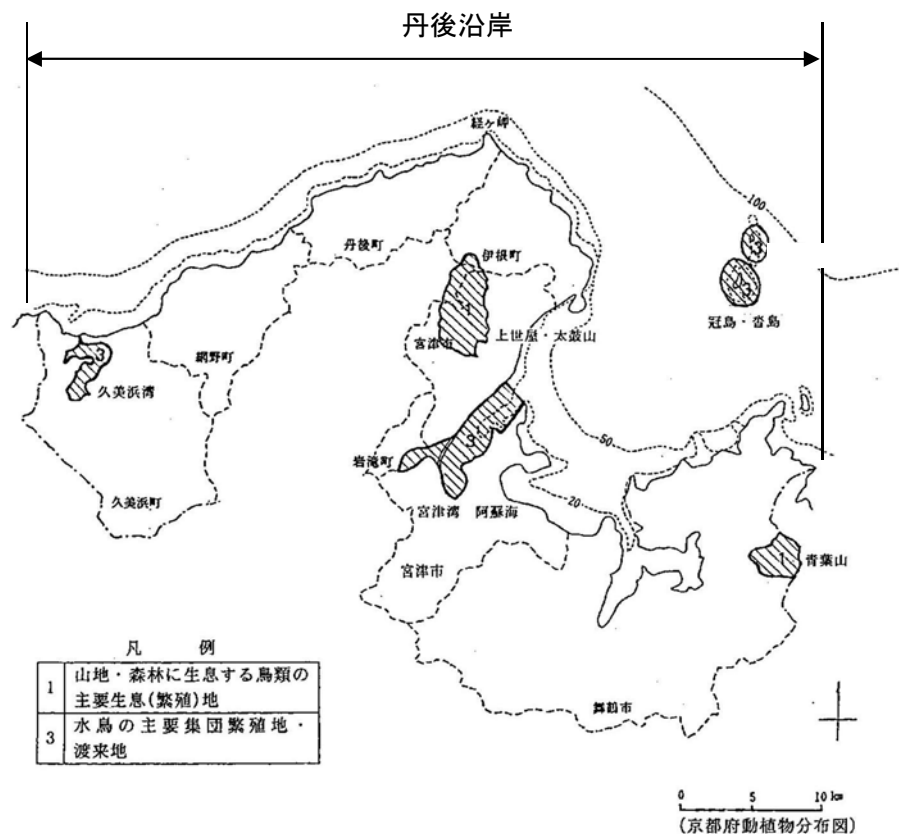


図 1-1-23 鳥類繁殖地分布図

出典：第 4 回自然環境保全基礎調査 京都府自然環境情報図（平成 7 年）

(10) 海域の生物

① 魚介類

丹後沿岸は、対馬海流の影響を多く受ける日本海に面した外洋性の海と、流入河川からの影響を多く受ける内湾性の若狭湾（宮津湾、舞鶴湾を含む）により構成され、生息生物もその影響を受けている。日本海側では、対馬海流の影響により、暖海性のマグロやトビウオなどが、春～夏に北上し、秋～冬の南下回遊の途中に来遊する。また、対馬暖流より下の層では水温が周年 1～2℃と冷たい海水によって占められ、ズワイガニ、ホッコクアカエビ、ハタハタなどの冷水性の魚類が生息している。

若狭湾は、河川（由良川等）からの流入により、豊富な栄養塩類に支えられた海となっている。代表的な生息生物は、二枚貝のアサリ、トリガイやカレイ類といった主に浅海域での砂泥を好むものの他、暖海を好むメジナ、アイゴ、ホンベラなどである。

当地域で漁獲される主な魚介類は、カタクチイワシ、サワラ、アジ類、イカ類、サバ類、ブリ類などがあげられる（図 1-1-24）。



図 1-1-24 京都でとれる主な魚介類

出典：京都府水産事務所「R7 京都の水産」

② 藻場

当地域の海域では、ヤツマタモク、ジョロモク、ヨレモク、マメタワラ、ノコギリモク、ナラサモ、イソモク、エゾノネジモク、ヤナギモク、アカモク、フシスジモクなど、複数種のホンダワラ科海藻^{かいそう}で構成されるガラモ場（ホンダワラ藻場）が岩礁域に広範囲に分布する。ガラモ場には、大規模な群落を形成しているホンダワラ科海藻の他、コンブ目（ワカメ、クロメ、アラメ）、小型褐藻類^{かつそうるい}（アミジグサ、ヘラヤハズ、シワヤハズ）、紅藻類^{こうそうるい}（マクサ、ムカデノリ、ピリヒバ、有節サンゴモ、無節サンゴモ類）、緑藻類^{りょくそうるい}（アナアオサ、ミル）が混在している。

また、久美浜湾、宮津湾、舞鶴湾などの内湾域や砂の流動が制限された沿岸浅所には海草アマモが繁茂する小規模なアマモ場が点在する。アマモ科の海草としては、アマモの他、砂地に生えるコアモモ、岩上に生えるエビアマモが分布する。

「第7回自然環境保全基礎調査 海域生物環境調査報告書」（平成20年、環境省自然環境局）によれば、京都府海域ではガラモ場が主体で全般に種数が少ないことが示されている。

京都府では平成17年度から平成22年度まで海藻着底基質の設置によるヘクター規模での藻場造成に取り組み、平成30年度から令和2年度に実施された藻場調査では京都府の藻場面積は約1,507haとされている（図1-1-25）。



図 1-1-25 主な藻場の分布区域

出典：環境生物多様性センター「藻場調査」（GISにより白地図と併せて表示）

1-2 社会的特性

1-2-1 海岸の歴史

丹後沿岸には、海岸が舞台となった史実・伝説・民話などが数多く残り、国内有数の古墳・遺跡が点在している。

丹後の国は、奈良時代に丹波の国から分離してできた。丹後の国の国府は、天橋立の府中であつたようである。しかし、古くは、丹後半島北部が国の中心であつたと推定され、古墳から出土品が発見されている。当時の福田川や竹野川などの河口には潟湖があり、港になっていたとされるが、河口閉塞により港としての機能を失い、港で繁栄していた豪族などが、天橋立周辺に移り、「遷都」されたものと考えられている（図1-1-26）。

海と陸との接点である「海岸」が、そこに住む人にとっていかに重要であり、生活に密着してきたものであつたかを示す歴史について、いくつか紹介する。



図1-1-26 竹野川河口潟湖推定図

出典：「歴史の中の天橋立とその形成の過程／岩垣雄一」 他

(1) 天橋立

天橋立は、波静かな外海の宮津湾と内海の阿蘇海を二つに割いて、白砂青松が延びる約3.6kmの砂嘴である。砂嘴のおよそ半分は、弥生時代にできたと考えられている。小式部内侍が『小倉百人一首』のなかで、憧憬を込めて詠み、江戸の頃より日本三景の一つとして名高い場所である。『丹後國風土記』逸文によると「伊射奈藝命が天と地を往来するための梯子で、伊射奈藝命が寝ている間に倒れて天橋立になった」と言われている（図1-1-27）。



図1-1-27 天橋立

天橋立は縄文海進（氷河期の後、縄文前期に海面が最も上昇した現象）で形成された。海面が上昇したことで、近隣河川から出てきた土砂が発達した沿岸流と湾外からの波によって湾奥へと運ばれ、その後、海面低下と漂砂により、天橋立の地形が形成されたとされている。現在の天橋立の形状に発達するまでには、3,500年かかると見られ、雪舟、貝原益軒、歌川広重らが、各時代に描き編集した絵や図では、少しずつ成長する天橋立の様子が残されている。

(2) 新井崎

伊根町の^{にいざき}新井崎には「徐福伝説」が伝えられている。徐福が実際に新井崎に上陸したかどうかは定かではなく、伝説も日本各地に残るが、地名のイネは稲に通じ、古代に大陸から稲作がもたらされた言い伝えにちなむと伊根町誌に記されている。

地形は急峻で幾段にも棚田が築かれている。伊根町に伝わる伝説では、秦の時代、司馬遷によって著された中国の正史『史記』では、始皇帝の命により不老長寿の薬を求めて大陸から海流に乗って徐福一行が辿り着いたのが新井崎とされている。このとき徐福がもたらしたとされたのが稲作技術や鑄鉄の技術、漢方医学や神仙思想である。このため、^{かんむりじま}冠島と^{くつじま}沓島は仙人が住む島と伝えられた（図 1-1-28）。



出典：「京都の伝説 丹後を歩く／福田晃・真下厚」 他

図 1-1-28 新井崎

■ 日本最古の舟着場（舞鶴市）



図 1-1-29 浦入

かつて舞鶴湾の近くに長さ約 300mの砂嘴があり、これに囲まれた小さな入り江は浦入^{うらにゅう}と呼ばれている（図 1-1-29）。遺跡調査の結果、この砂嘴は縄文海進によって形成されたことが明らかになった。砂嘴の起点近くからは、杭や碇とともに、海進で埋もれた丸木舟が見つかり、日本最古の舟着場とされた。

この丸木舟は杉をくり貫いて造ったもので、推定全長 10m（残存長 4.6m）、幅約 1m、舟底の厚さ 7cm である。年代測定の結果、約 5,300 年前のものとされた

（図 1-1-30）。舟の大きさから見て、漁業のためだけでなく、交易にも利用したものと考えられる。浦入の人々は、ここに住み始めた縄文早期後半から、ここを定住の場だけでなく、季節生活の場、漁労活動の基地、風待ちなど、多目的に利用し



図 1-1-30 丸木舟

1-2-2 沿岸利用の現況

(1) 地域の生活利用

丹後地方は、山地が海に迫り、平地が少ない地形である。

海沿いの集落は、あまり農耕に適しておらず、日常生活と海岸・海は非常に密接な関わりがある。昔から、「半農半漁」と言われるような、小規模な採取漁業が、生活の中で行われてきており、「里海」として海が利用されてきた。舞鶴湾、宮津湾・阿蘇海、久美浜湾など、波が穏やかなところでは、伝統的な漁業が行われてきたが、近年は船舶を利用した大規模漁業に切り替わり、多くの漁港が整備されることとなった。

舞鶴湾は湾奥まで日本海の荒波が入り込まない、穏やかな天然の良港となっており、カキやワカメなどの養殖が盛んである。宮津湾は、水産業が盛んで、タイ類やナマコなどが水揚げされる他、阿蘇海ではイワシなどが漁獲される。久美浜湾は閉鎖性の高い水域であり、湾内ではカキの養殖が盛んに行われている。このように、それぞれの湾で地域の生活利用が分かれている。

昭和30年代頃まで、道路が通じず「陸の孤島」であったところも多く、外との連絡に長く船舶が使われており、これらの集落では、海岸は玄関の役割も果たしていた。砂浜、ゴロタ石浜などが、そのまま船揚に利用され、海岸に「船小屋」ができることとなった。これらは、現在も数多く残っている。特に、極端に背後地が狭小である伊根湾^{いねわん}周辺では、これが住居も兼ねた「舟屋」に発展したものと考えられる(図1-1-31)。

自然の海岸を小規模に改変し、栈橋として使用するケースも多く、舞鶴湾内や宮津から伊根にかけての海岸線沿いでは、これが発展して定期旅客航路が運航されていた。現在もオーバーツーリズム対策として宮津から伊根までの臨時旅客船が運航されている。

沿岸部の利便性を高める道路などの整備により、沿岸部に住む人々だけでなく、多くの人々が海水浴や釣りを楽しむなど、沿岸地域の利用形態が変化している。



図 1-1-31 舟屋

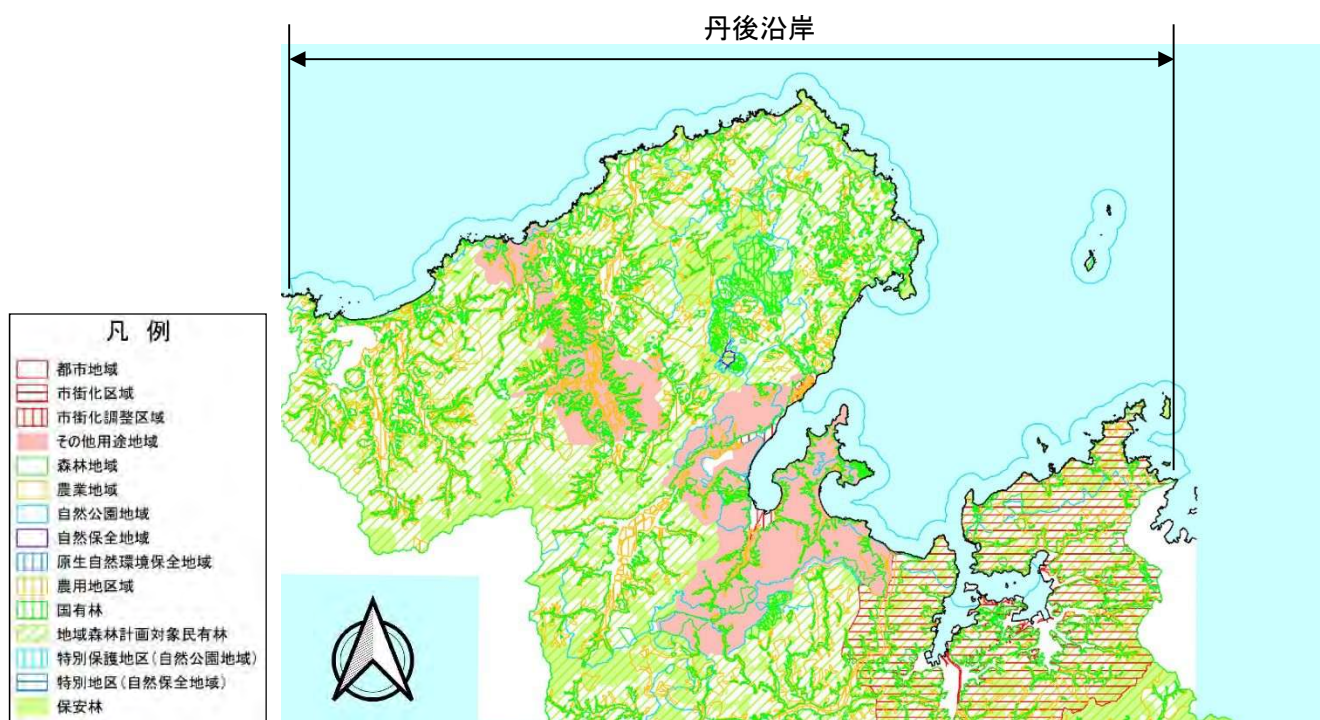
(2) 土地利用及び人口分布

丹後沿岸の3市2町では約17万人が生活をしている。沿岸市町の人口は、令和2年国勢調査結果によると、舞鶴市80,336人、京丹後市50,860人、宮津市16,758人、与謝野町20,092人、伊根町1,928人である。

令和5年の統計によると、丹後沿岸の市町における地目別土地面積の構成比は、山林が最も多く55.0%を占めており、田20.6%、畑7.7%、宅地は9.8%となっている。

また宅地を市町別にみると、舞鶴市が37.2%、次いで京丹後市が36.2%と、宅地の約7割を両市で占めている。

丹後沿岸の大部分が森林地域となっており、舞鶴港周辺と宮津市の天橋立付近が市街化区域又は、市街化調整区域に指定されている（図1-1-32）。



出典：国土交通省 国土数値情報 (<https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/>) (GISにより表示)

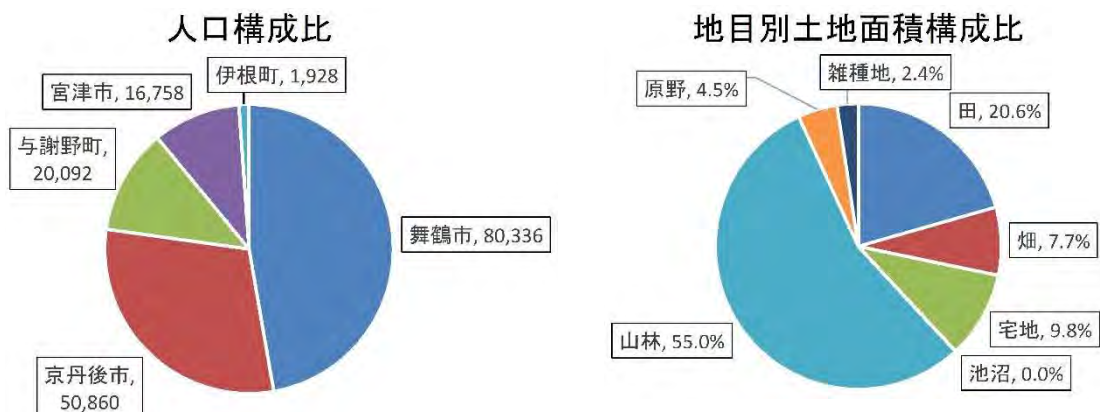


図1-1-32 土地利用

出典：「令和5年度京都府統計書」

(「2-2. 市町村の人口、人口密度(国勢調査結果)」及び「1-6. 地目別土地面積」の数値をグラフ化)

(3) 港湾の利用状況

港湾としては、重要港湾の舞鶴港と地方港湾の宮津港及び久美浜港が存在する（図 1-1-33）。

重要港湾舞鶴港は京都府北部地域の開発拠点として、また、近畿圏の日本海側の門戸港として重要な役割を担っている（図 1-1-34）。総取扱貨物量は約 955 万トンで外貿貨物では石炭や完成自動車が主要品目となっており、内貿貨物では窯業品やセメントが主要品目となっている（表 1-1-4、表 1-1-5、図 1-1-35）。また、近年では外航クルーズ船の寄港が増加し賑わいをみせている（図 1-1-36）。

宮津港は主にニッケル鉱石、石炭などの鉱産品や水産品を取り扱っている他、海洋性リゾート・レクリエーション拠点や漁業基地として利用されている。

久美浜港は主に水産品を取り扱っている他、海の幸をはじめとするグルメの魅力とあわせて、大きな観光資源となっている。

表 1-1-4 令和6年 取扱貨物量

取扱貨物量（千トン）			
区分	舞鶴港	宮津港	久美浜港
外貿	3,906	111	-
内貿	5,646	9	1
合計	9,553	120	1

表 1-1-5 令和6年 入港船舶数

入港船舶数			
トン数	舞鶴港	宮津港	久美浜港
1万トン以上	325	2	-
1千～1万トン	698	4	-
1千トン未満	2,770	107	1,376
総数	3,793	113	1,376

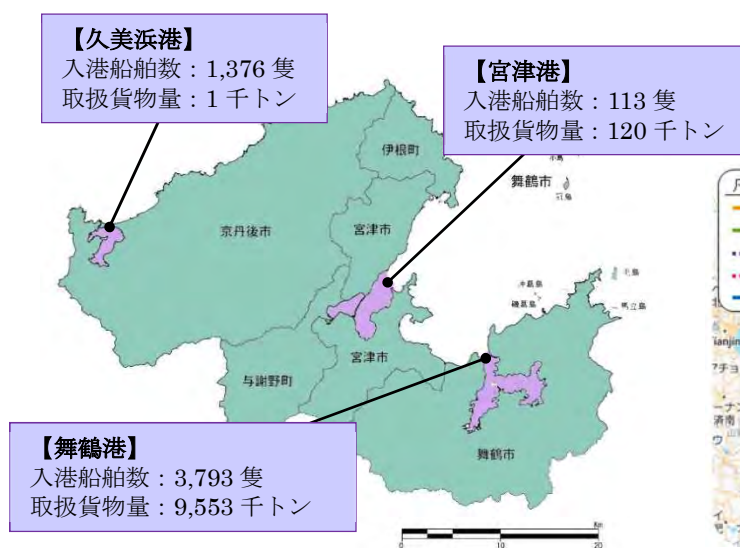


図 1-1-33 港湾の利用状況



図 1-1-34 舞鶴港



図 1-1-35 航路図



図 1-1-36 外航クルーズ
(ダイヤモンド・プリンセス)

(4) 漁業の状況

① 海面生産量及び生産額

京都府では、生産量、生産額ともに大型定置網の比率が高く、大半を占めている。全国でも、大型定置網による生産量が80%以上を占める都道府県は京都府だけである。

近年の特徴として、サワラの生産量が増加している。京都府のサワラ生産量は平成11年から急増し、これまでに6回日本一となり、現在でも生産量、生産額ともに上位を占め、京都府の漁業において非常に重要な魚種となっている。

魚類の生産量は、イワシ類、サワラが特に多くなっている。また、水産動物類のイカ類やサザエ、アサリなどの貝類、ワカメ類をはじめとする海藻類の漁獲量も多い(図1-1-37、表1-1-6)。

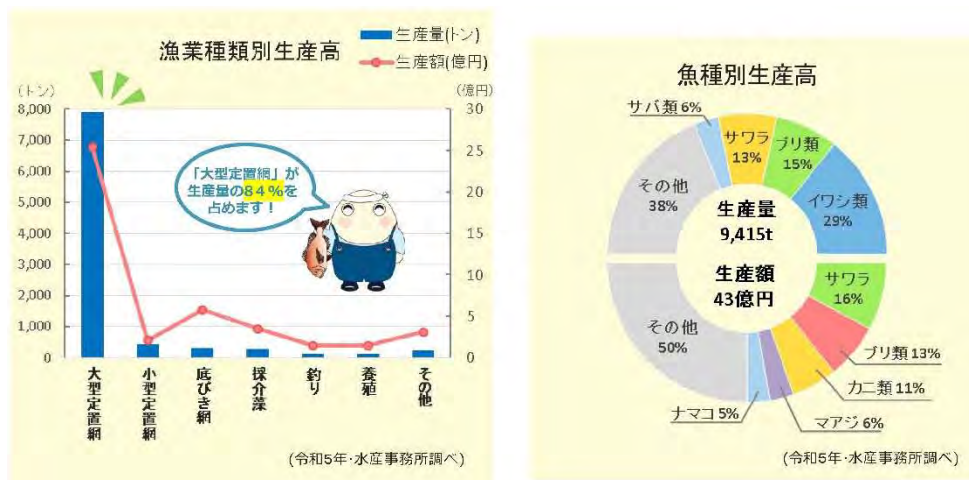


図 1-1-37 漁業種類別・魚種別生産量及び生産額

出典: 「R7 京都の水産」

表 1-1-6 魚種別生産量

単位: t

魚種	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年
魚類	10,105	7,691	8,942	7,684	10,654	8,495
えび類	7	7	7	6	8	9
かに類	65	64	47	52	65	55
いか類	377	281	325	350	235	269
たこ類	43	43	38	47	39	42
うに類	-	-	5	1	0	0
海産哺乳類	-	-	-	2	1	2
貝類	260	273	184	183	228	284
その他の水産動物	99	-	-	-	-	-
海藻類	65	57	51	41	42	57
総数	11,021	8,416	9,599	8,366	11,272	9,370

注: 数字を丸めているため総数と内容は一致しない

出典: 海面漁業生産統計調査(農林水産省)

② 海面養殖生産量

海面養殖生産量は平成30年時点が759tであったのに対し、令和2年時点が944tと増加している（表1-1-7）。また、海面養殖漁場は、伊根町、宮津市、舞鶴市のうち外洋に面する地区ではブリ類やタイ類、クロマグロ、ワカメなどが主であり、特に舞鶴湾、宮津湾などの内湾ではカキ類や海藻類が主となっている。

表 1-1-7 海面養殖生産量

単位：t

魚種	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年
海面養殖業収穫量	759	777	944	776	832	718

出典：海面漁業生産統計調査（農林水産省）

③ 漁港

丹後沿岸には合計33港の漁港がある。そのうち京都府が管理する漁港として、舞鶴市に第3種漁港の舞鶴漁港、京丹後市に第4種漁港の中浜漁港がある。

また、第1種漁港、第2種漁港はそれぞれ漁港が所在している各市町が管理している（表1-1-8、図1-1-38）。

表 1-1-8 漁港一覧

所在地	第1種	第2種	第3種	第4種	所在地	第1種	第2種	第3種	第4種
舞鶴市	成生	野原	舞鶴		京丹後市	袖志	間人		中浜
	瀬崎	竜宮浜				竹野	浅茂川		
	西大浦	田井(舞鶴)				小間			
	水ヶ浦					砂方			
宮津市	神崎					三津			
	島陰	栗田				遊			
	由良	養老				浜詰			
	溝尻					磯			
伊根町	田井(栗田)					蒲井			
	泊	伊根				旭			
		新井							
		浦島							
		本庄							



図 1-1-38 漁港位置図

(5) 交通

丹後沿岸の交通は、古来より大陸からの表玄関として栄えるとともに、海路と丹後街道・若狭街道を結んで、地域の発展に寄与してきた。

現在の道路・鉄道交通網は、京都や大阪などの都市部から丹後沿岸に向けて延びており、京都縦貫自動車道や舞鶴若狭自動車道などの高速道路に加え、京都丹後鉄道や直通の特急などが、都市部と丹後沿岸をつないでいる。

平成 29 年に木津 IC から京丹後大宮 IC まで京都府域の南北約 140km が高速道路でつながったことにより、丹後沿岸へは、車で京都縦貫自動車道を経由すると、木津川市から 1 時間 50 分程度で訪れることが可能である。大阪からは京都縦貫自動車道の他、舞鶴若狭自動車道などを経由して、2 時間程度でアクセス可能である(図 1-1-39)。

また、舞鶴港は韓国などを結ぶ航路や北海道を結ぶフェリーを有する近畿で唯一の日本海側拠点港である(図 1-1-35)。



図 1-1-39 交通網図

(6) 海岸の利用状況

① 観光

丹後沿岸は、多くの観光スポットが点在し「琴引浜の鳴き砂保全の取組み」や「天橋立世界遺産登録推進会議」、「海の京都観光圏整備計画」などの取り組みにより、全国からの多くの観光旅客の来訪がある地域である。

山陰海岸は、複雑に入り組んだリアス海岸や奇岩、ポケットビーチなど、貴重な地形が織り成す絶景スポットが数多く存在する。平成 22 年に山陰海岸ジオパークとして認定され、沿岸域では海岸の特性を活かしたものが多く、美しい景観を眺めながら、海水浴や温泉などを楽しむ旅行者で賑わっている。

舞鶴市は、日本海に面した港町として発展してきた海軍ゆかりのまちであり、明治から大正期にかけて旧日本海軍により整備された赤れんが建造物群が現在も数多く残されている。これらの赤れんが倉庫は国の重要文化財に指定され、保存・活用を図る拠点として「舞鶴赤れんがパーク」が整備され、観光・交流・イベントの核となっている。また、西舞鶴地区には田辺城を中心とした城下町の歴史的景観が残り、港町と城下町が共存する特色ある都市構造を形成している。さらに舞鶴湾では、五老ヶ岳から望む景観が近畿百景第 1 位に選ばれるなどすぐれた景観を有するとともに、海上自衛隊艦艇を間近に望む湾内クルーズが運航されるなど、海軍の歴史と港湾景観を活かした観光が展開されており、歴史・文化・海を一体的に体感できる観光都市としての魅力を高めている。

宮津市には、丹後沿岸だけでなく、京都府を代表する観光地として、国の重要な文化的景観に指定されている天橋立がある。天橋立は特別名勝に指定された日本を代表する景勝地の一つである。

丹後半島に位置する伊根町には、海の上に建つ舟屋が、伊根湾を取り囲むように立ち並んでいる。この独特の風景から、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。舟屋群を海から眺めることのできる遊覧船や、舟屋を改修した民宿など、観光スポットとして近年注目を浴びている。

宮津湾と伊根湾は、「世界で最も美しい湾クラブ」に加盟（平成 28 年 11 月）し、美しい湾がある世界の観光地との交流を深め、「海の京都」の魅力を発信している。

京丹後市は日本海に面した自然豊かな地域であり、リアス海岸や砂浜を有する温泉地である。なかでも、夕日ヶ浦温泉は、海岸線と温泉の組み合わせによる絶景が評価され、「温泉総選挙 2023」の絶景部門で 1 位を受賞した（図 1-1-40）。

また、兜山山頂^{かぶとやま}にある展望施設は、久美浜湾、小天橋、日本海と国立公園にふさわしい素晴らしい景色が一望できる（図 1-1-41）



図 1-1-40 夕日ヶ浦 25



図 1-1-41 観光スポット 位置図

② 海水浴場

丹後沿岸には 22 箇所の海水浴場がある。市町別では、京丹後市に 14 箇所、宮津市と舞鶴市が各 3 箇所、伊根町が 2 箇所である（図 1-1-42）。

鳴き砂で有名な琴引浜をはじめ、箱石海水浴場のような遠浅海岸、名勝「立岩」^{たていわ}を背景にした立岩・後ヶ浜海水浴場^{のちがはま}、温泉が併設されている八丁浜など、それぞれ特徴的な海水浴場があり、多くの海水浴客が訪れている（図 1-1-43）。

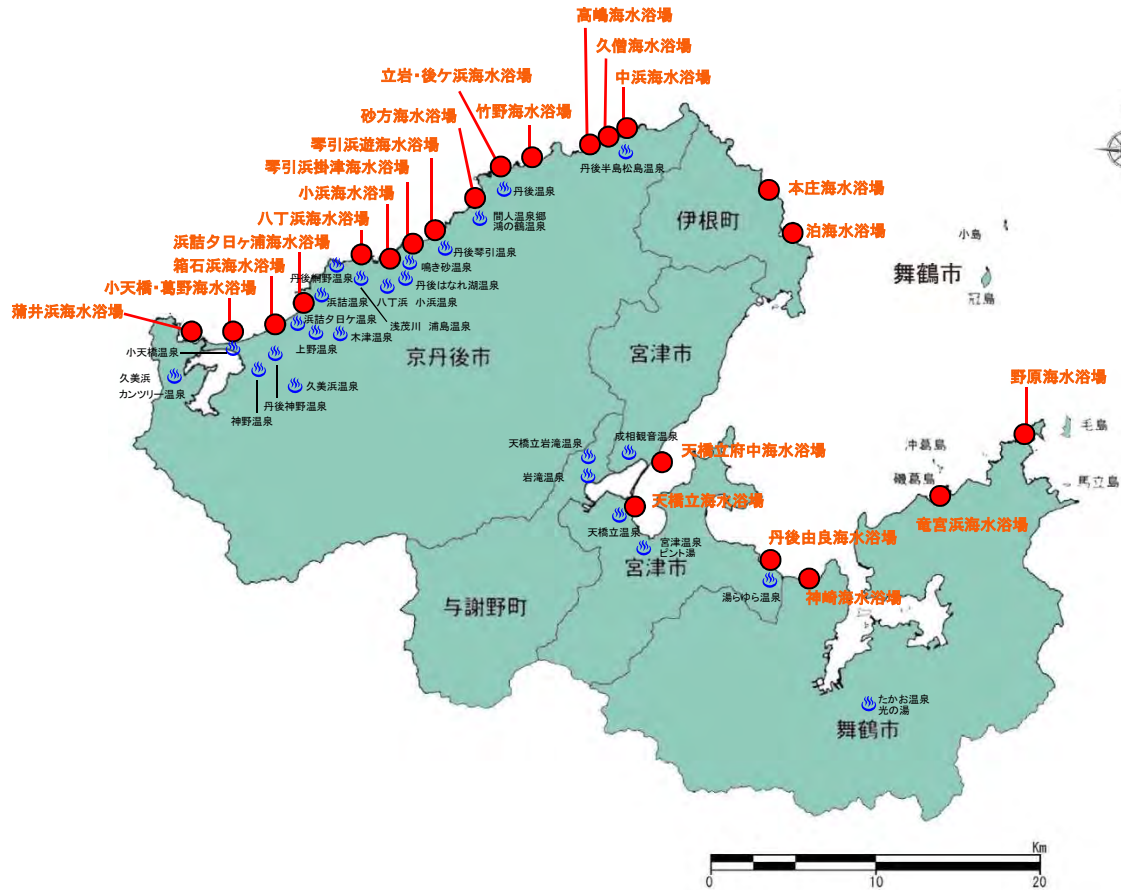


図 1-1-42 主な海水浴場



ことひきはまあそびかいすいよくじょう
図 1-1-43 琴引浜遊海水浴場

③ 遊漁

丹後沿岸の主な海釣り場は、湊^{みなと}～伊根^{いね}の海岸線、宮津湾、栗田湾、舞鶴湾、大浦半島のほぼ全域の海岸線に分布している。

遊漁対象魚種は様々であり、船釣りをはじめ、内湾部でのイカダ釣り、岩礁部での磯釣りなどが沿岸遊漁の主なものとなっている。

④ 入込客数

年間の観光入込客数を市町別に見ると、宮津市の301万人が最多であり、次いで舞鶴市の228万人、京丹後市の185万人と続いている（図1-1-45）。観光消費は宮津市が約143億円で最も多い（令和6年集計結果）。京都縦貫自動車道の全線開通や、「海の京都博」の開催の効果により、入込客数は年々増加している。

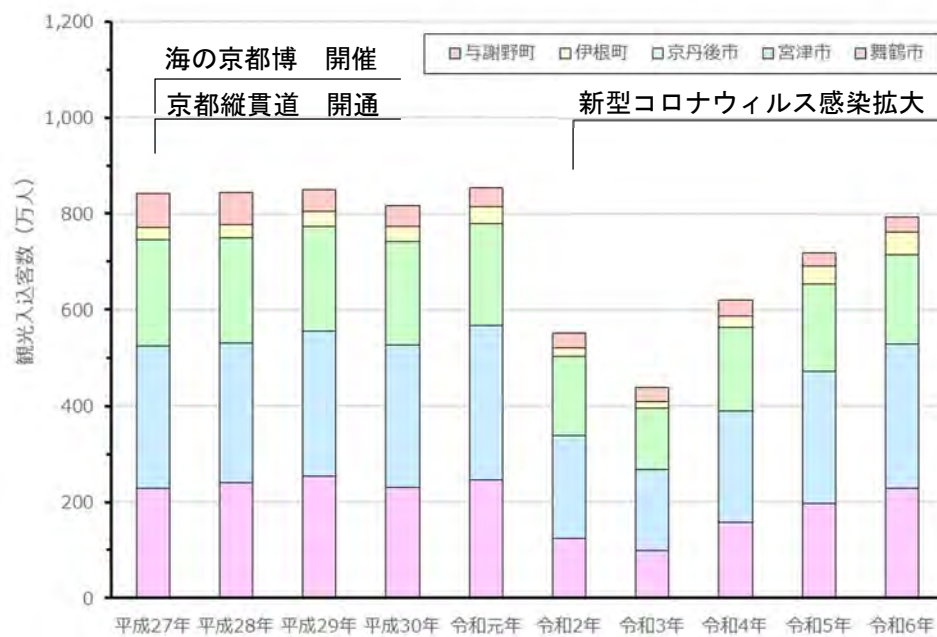


図1-1-44 観光入込客数

出典：京都府商工労働観光部

「京都府観光入込客など調査報告書」（過去10年間分の統計をグラフ化）

⑤ 祭り・イベント

丹後沿岸では、その生活とともに生まれ、伝えられてきた祭りがある。また、ニーズの多様化に対応して新たなイベントも催されている。

伝統的な祭事には、老人嶋神社祭礼（雄島まいり）（舞鶴市）、吉原の太刀振（舞鶴市）、吉原の万灯籠（舞鶴市）、文殊堂出船祭（宮津市）、浅茂川水無月祭（京丹後市網野町）、神谷太刀宮秋祭（京丹後市久美浜町）、百度打ち（京丹後市丹後町）、初午祭（京丹後市網野町）、齋宮初午祭（京丹後市丹後町）、伊根祭（伊根町）、岩滝祭（与謝野町）などがある（図 1-1-48）。

イベントには、舞鶴赤れんがハーフマラソン（舞鶴市）、間人みなと祭（京丹後市丹後町）、中浜みなと祭（京丹後市丹後町）、夕日ヶ浦納涼花火大会（京丹後市網野町）、京丹後ちりめん祭り（京丹後市網野町）、京丹後市ドラゴンカーヌー選手権大会（京丹後市久美浜町）、丹後 100km ウルト라마ラソン（京丹後市）などがある。

■ 老人嶋神社祭礼（雄島まいり）（舞鶴市）

年に一度（6月1日）野原漁港・竜宮浜漁港から冠島に上陸し、漁民の信仰が厚い老人嶋神社に参拝する行事。舞鶴では昔から冠島は神の島とされ、「雄島さん」と呼ばれている（図 1-1-45）。



図 1-1-45 老人嶋神社祭礼(雄島まいり)

■ 文殊堂出船祭（宮津市）

松明に火が灯り、燈籠が流れ、海上舞台の上ではドラや太鼓に合わせ金や銀の龍が乱舞する。夜空には大輪の花が咲く。智恩寺文殊堂の伝統行事。



図 1-1-46 浅茂川水無月祭

■ 浅茂川水無月祭（京丹後市網野町）

昼の神輿巡行から夜の花火大会まで沢山の人で賑わう、網野町内最大の夏祭り。神輿巡行の見せ場、海上渡御では担ぎ手の勇ましい掛け声が八丁浜に響き渡る（図 1-1-46）。

■ 神谷太刀宮秋祭（京丹後市久美浜町）

10月第二土日に、5基の太鼓台が町内を練り歩きながら神谷太刀宮へ集結し、太鼓を奉納する祭り。

■ 百度打ち（京丹後市丹後町）

区民の無病息災を祈願する江戸時代からの行事。間人地区内を、化粧まわしを締めた男衆が駆け巡る。

■ 伊根祭（伊根町）

「海の祇園祭」とも言われ、海上安全、大漁、五穀豊穡を祈願する江戸時代から続く伝統行事。祭りは例祭と大祭に分かれ、大祭は例祭の行事の他に船屋台4舳が海上渡御を行う。例祭では御稚児舞・太刀振り・神楽・祭礼船での宮入・夜宮があり、多くの人で賑わう（図 1-1-47）。



図 1-1-47 伊根祭

■ 岩滝祭（与謝野町）

岩滝地域にある各神社の例祭で、宮中に入る神楽の中でも最高の格式を誇る「岩滝神楽」をはじめ、太刀振りなどが奉納される。

約 160 年前から伝わる岩滝神楽は、郷土芸能として保存されており丹後の神楽のはじめとも云われ、町の無形文化財にも指定されている。

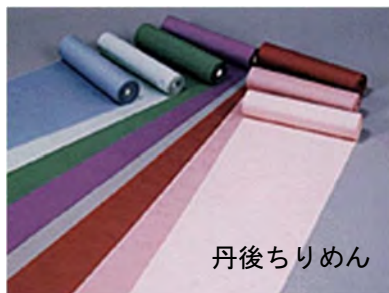
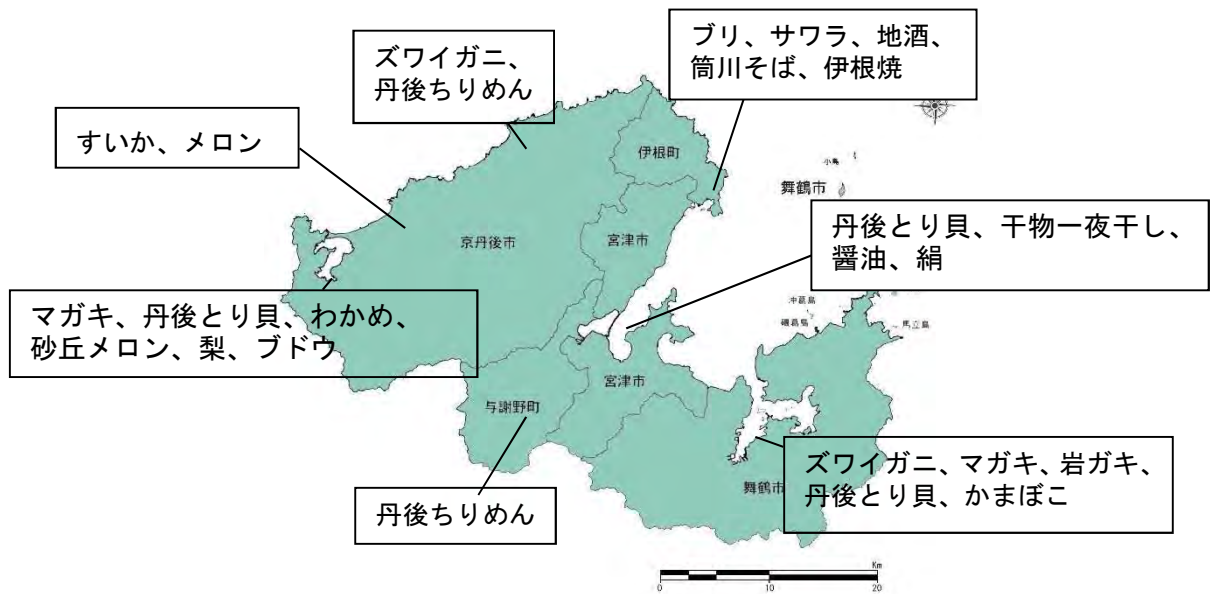
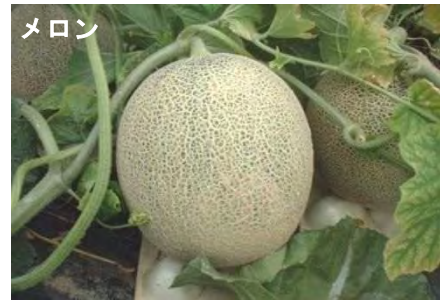


図 1-1-48 イベント・祭 位置図

(7) 地場特産

各市町とも、海産物及び水産加工品が、特産品として挙げられる。中でも、冬の味覚として名高い「ズワイガニ」は、日本海特有の名産品である。

丹後沿岸では「ブリ」、「とり貝」、「岩ガキ」などが水揚げされており、年間を通じて、日本海の恵みを味わうことができる。また京丹後市では、砂丘や丘陵地といった地形を生かして、メロンや梨、ぶどうなどの果物も多数栽培されている。また、丹後地方で生産される高級絹織物として「丹後ちりめん」が有名である（図1-1-49）。



丹後とり貝



図 1-1-49 市町の地場特産(特産品)

出典：京都府 HP、京丹後市 HP、伊根町観光協会 HP

2 海岸保全の基本理念

丹後沿岸における海岸保全の方向性を定めるに当たり、本沿岸への対応及びその保全について、「基本理念」を以下のように設定し、これに基づき海岸保全を行う（図 1-2-1）。

太古から続く、歴史と風土が息づく豊かな海と
海辺のくらしを未来へと伝承するため
海岸保全に取り組む

悠久・雄大な自然と共に生きる ～『海の京都』なぎさ回廊～



図 1-2-1 基本理念 イメージ

次項より「防護」「環境・景観」「親水・利用」の観点から、丹後沿岸の現況と課題を整理し、海岸保全の基本方針を定める。

3 海岸保全の現況と課題

前項までの自然的特性や社会的特性を踏まえて、「防護」「環境・景観」「親水・利用」の観点から現状や課題を整理し、海岸を保全するための基本方針を定める。

3-1 防護面からみた現況と課題

(1) 沿岸の災害

丹後沿岸では、これまで波浪や高潮などにより、多くの人命や資産が一度に失われたり、広範囲に施設が倒壊するなどの甚大な海岸災害は受けていない。しかし、冬季風浪や高潮などにより、一部の地域では施設の破損や背後地にある民家の浸水などが発生している（図 1-3-1）。



図 1-3-1 冬季風浪による海岸保全施設の被災

近年では、令和 3 年 8 月の熱帯低気圧や令和 5 年の台風 7 号、令和 7 年 8 月の高潮などに伴い、高潮・高波の影響による道路や家屋の浸水被害が発生した（図 1-3-2）。

(R3 浸水、宮津市)



(R5 浸水、与謝野)



(R7 浸水、舞鶴市)



図 1-3-2 浸水被害状況

丹後沿岸に來襲した津波は、昭和 15 年の「積丹半島沖地震」による津波や昭和 58 年の「日本海中部地震」による津波、平成 5 年の「北海道南西沖地震」による津波の記録が残されている。記録によれば、住家への浸水や漁船の被害などが発生している（図 1-3-3）。平成 5 年以降、京都府内では津波による浸水被害は確認されていない。

発生年	地震名	M	痕跡高 (京都府)
S15年	積丹半島沖地震 (神威岬沖)	7.5	0.6m [※]
S58年	日本海中部地震	7.7	2.7m
H5年	北海道南西沖地震	7.8	1.4m



※：高さの基準は不明（参考値）

図 1-3-3 丹後沿岸に來襲した主な津波

このように、甚大な被害はないものの、部分的な破損や浸水が生じており、津波による脅威にもさらされている。

(2) 漂砂特性と地形変化状況

丹後沿岸は、波向に応じて沿岸漂砂の卓越方向が変化する海岸や、一定方向に沿岸漂砂が卓越する海岸、岸沖漂砂が卓越する海岸など、様々な漂砂特性がある。

これらの代表的な海岸である久僧海岸、天橋立地区海岸～日置地区海岸、神崎海岸～由良海岸について、それらの漂砂特性と地形変化状況などについて示す。

① 久僧海岸

久僧海岸は、丹後半島の先端経ヶ岬の西側約 5km に位置する、全長約 600m のポケットビーチである。

沿岸漂砂は波向に応じて東西方向に移動し、弓形の砂浜形状が形成されている。このような弓形の砂浜では、岬の遮蔽域に当たる両端では砂の移動は小さく、中央部で大きくなる特性を有している。近年、砂浜全体の土砂量が減少しており、中央部で汀線後退と浜崖が生じている。

越波災害などの防災上、海水浴場としての利用上も支障があり、さらに侵食が進むと背後地の人家、道路、田畑などに直接被害を及ぼすおそれがあるため、潜堤（人工リーフ）の改良や養浜による侵食対策を行っている（図 1-3-4）。



図 1-3-4 久僧海岸の浜崖

② 天橋立地区海岸～日置地区海岸

天橋立海岸は、宮津湾西部に位置し、宮津湾と阿蘇海を区分して江尻から南西方向に全長約 3,600m に及ぶ砂嘴地形海岸である。砂嘴には数千本の松が成育し、その松並木と白砂の海の景観は松島、宮島と並び日本三景の 1 つに挙げられ、大正 11 年（1922 年）には名勝地、昭和 27 年（1952 年）には特別名勝地に指定されている。また、日本で最初にサンドバイパスが施工されたことでも広く知られている。

天橋立海岸は、南に向かう一方向の卓越した沿岸漂砂の堆積作用により形成されたもので、河川からの流出土砂量の減少や防波堤などの構造物設置に伴い、昭和 20 年（1945 年）代頃から砂浜の侵食が顕著になり、一時はその存在そのものが危ぶまれる状態であった。このため、昭和 26 年（1951 年）頃から調査を開始し、これまでに突堤・養浜・サンドバイパス・サンドリサイクル・潜堤などによる侵食対策を実施してきた。当初、大小の突堤群を設置してきたが、海岸への漂砂供給が不足していることから根本的な解決には至らなかった。そこで、昭和 54 年（1979 年）に旧運輸省と京都府が共同で学識者を含めた研究会を設立し、詳細な調査・試験施工を重ね、緊急養浜事業やサンドバイパスの事業化を進めた結果、汀線は平均約 20m 前進し、突堤の上手側ではその先端ま

で砂が堆積するなど、一定の漂砂の連続性が確保されるようになった。一方、突堤の下手側では砂が堆積せず、突堤群によって形成された汀線形状はノコギリ状となり、景観面や砂浜の利用制限などの新たな課題が生じるようになった。このため、模型実験・試験施工を経て、突堤先端の下手側に潜堤を設置し、漂砂を制御することで汀線を滑らかにする工法を採用し、平成4年（1992年）以降順次対策を行ってきた。また、平成18年（2006年）には潜堤の効果検証や海岸整備方針の検討を行い、効果的・効率的な潜堤形状とその配置計画及び施設配置を踏まえたサンドバイパス・サンドリサイクルの運用方針が決定された。

この方針に基づき、改良を含む全12基の潜堤が完了するとともに、サンドバイパス・サンドリサイクル事業を継続している（図1-3-5）。



図 1-3-5 天橋立

③ 神崎海岸～由良海岸

由良川河口に位置する神崎海岸及び由良海岸は、沿岸漂砂よりも岸沖漂砂が卓越する海岸である。昭和30年頃までは、50～100mの広い砂浜を有していたものの、侵食が進み昭和40年代には、由良川河口付近で5～10m程度の砂浜幅まで後退した。その後、計15基の離岸堤が設置され砂浜が回復したが、近年の冬季風浪により、消波ブロックなどの散乱などによる離岸堤の沈下が進行しており、再び侵食傾向となっている。このため、神崎海岸では侵食・高潮対策事業として、突堤及び潜堤（人工リーフ）の整備が進められており、また由良海岸では定期的な汀線測量を実施している。

地形変化特性としては、河口付近は由良川からの出水に強く影響されること、岸沖漂砂により岸から200～300m（水深3～5m）の所に沿岸砂州が形成されることが特徴である（図1-3-6）。



図 1-3-6 由良川河口の神崎海岸・由良海岸

(3) 海岸保全施設の現況と老朽化

越波や海岸侵食対策として護岸や離岸堤など、海岸保全施設の整備を進めており、一部では砂浜が回復している海岸もあるが、離岸堤開口部の背後において、局部的に護岸基部まで侵食が進行している海岸もある。

丹後沿岸には護岸、突堤、離岸堤などの海岸保全施設が整備されているが、現状では防護水準を上回る想定外の外力に対しては、十分な保全機能を有しているとは言えない状況である。今まで海岸侵食が顕在化していなかったために、海岸保全施設は、主として越波を抑止する目的で護岸を設置したところが多く、その天端高は外海側で T. P. +1.5m～6.0m 程度であり、道路護岸では、必要に応じて消波工や根固工が併設されている。

全体的な海岸の保全状況は概ね良好であるが、一部の砂浜などでは侵食の進行が懸念されており、近年、侵食に対する施設として、離岸堤や突堤、潜堤（人工リーフ）が整備されつつある。しかし、海岸保全施設そのものが沿岸漂砂遮断の原因になることがあり、新たな地形変化が生じてきている箇所も見られる。

また、海岸保全施設は、高度経済成長期に集中して施設を整備されたので、老朽化が進行している（図 1-3-7、図 1-3-8）。丹後沿岸における海岸護岸（港湾・一般海岸）を約 60km 整備しているが、平成 28 年度の調査では、整備から 50 年以上経過する施設が約 23km（39%）、20 年後の令和 18 年には約 46km（76%）となる結果となった（図 1-3-9）。



胸壁（パラペット）の亀裂

図 1-3-7 護岸の老朽化



堤防の老朽化

図 1-3-8 施設の老朽化

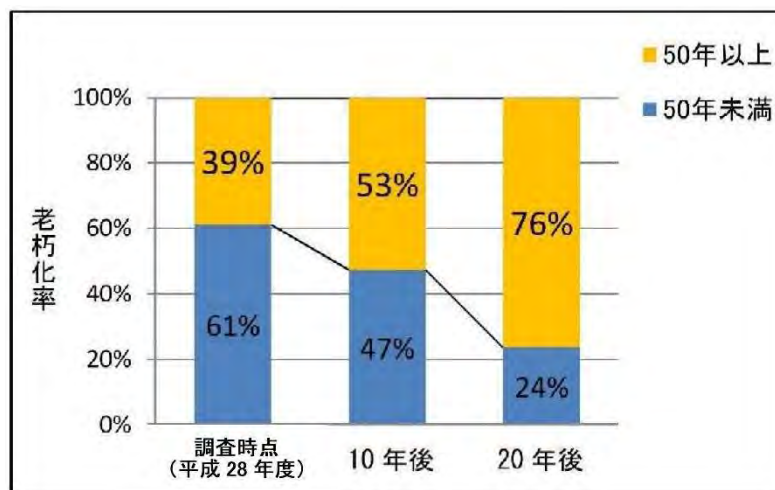


図 1-3-9 海岸保全施設の老朽化の推移